$$i_1 = \frac{f_1}{u_1 - u_2}$$

$$i_2 = \frac{f_2}{u_2} - i_1$$

二、作業級ノ取扱ハ檢訂期ニ於テ次ノ如ク爲スコト

(イ)特定林分中當該施業期間ニ於テ更新セル林分ヲ普通作業級ニ歸屬セシムルコト

(ロ)普通作業級中稚メ前檢訂期ニ於テ選定セル林分ヲ特定林分ニ編入スルコト

(ハ)普通作業級中次檢訂期ニ於テ特定林分ニ編入スヘキ林分ヲ豫選スルコト

(ニ)特定林分中被害其他ノ事由ニ因リ大材生産ノ目的ヲ遂シ能ハサル林分ヲ普通作業級中之ニ替ルヘキ適當ナル林分ト編替フルコト

三、作業級ノ樹種ハ杉、扁柏、松及檜ト爲スコト

四、作業級ノ輪伐期ハ大凡次ノ如キ標準ニ依ルコト

杉	二〇〇年
扁柏	二五〇年
松	二〇〇年
檜	二五〇年

四、作業級ノ面積ハ一事業區ニ於テ成ルヘク杉、松ハ二百町歩以上、扁柏、檜ハ三百町歩以上ト爲スコト

六、作業級ノ總面積ハ全大林區ヲ通シテ杉二萬町歩扁柏、松、檜各一萬町歩ヲ最小限度トシ各大林區ニ於ケル面積ノ分配ハ大凡次ノ如キ標準ニ依ルコト

	杉	扁柏	松	檜	計
青森	三、〇〇〇町	一、二〇〇町	二、三〇〇町	一〇、〇〇〇町	一六、五〇〇町
秋田	五、〇〇〇	九〇〇	一、七〇〇	—	七、六〇〇
東京	六、五〇〇	三、三〇〇	三、三〇〇	—	一三、一〇〇
大阪	一、八〇〇	九〇〇	一、四〇〇	—	四、一〇〇
高知	九〇〇	九〇〇	四〇〇	—	二、二〇〇
熊本	八〇〇	八〇〇	四〇〇	—	二、〇〇〇
鹿兒島	二、〇〇〇	二、〇〇〇	五〇〇	—	四、五〇〇
計	二〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇

七、一事業區ニ於ケル作業級ノ面積ハ檢定期ニ於テ之ヲ決定シ當該事業區ノ施業仕組ニ稽エ年伐量ノ激減ヲ來ササラシムル程度ニ於テ成ルヘク短期間ニ漸次作業級ノ設置ヲ完了スルコト

八、長期輪伐作業級中ノ特定林分ハ差向次ノ如キ林齢ヲ有スル林分中ヨリ之ヲ選定スルコト

杉	七〇年以上
扁柏	八〇年以上
松	六〇年以上
檜	一二〇年以上

第二、欅、櫸、胡桃、楡、檜等ノ特殊濶葉樹ニ在リテハ施業案ニ於テ大體上大材生産ノ計畫ヲ樹テツヽアルヲ以テ新ニ長期輪伐施業級ノ設置ヲ要セサルモ大材生産ノ見込アル林分ハ左記各號ニ依リ之ヲ取扱フヘシ

一、林分ノ保殘ニ關スル計畫ハ檢訂期ニ於テ之ヲ樹ツルコト

二、伐採順序ハ成ルヘク現實林木ヲ保存スルノ趣旨ヲ以テ之ヲ定ムルコト

三、未熟林木ハ施業案ノ實行ニ當リテ伐採ヲ見合セ其ノ保存方法ヲ講スルコト

右

其二、保護林設定

國有林ノ經營ニ當リテ、深ク公安公益ノ關係ニ考慮ヲ拂ハレタルハ更メテ絮說スルヲ要セスト雖、彼ノ一般法令ノ定ムル所ニ依リテ施爲スヘキ、保安林、砂防指定地等ノ外、公安公益ノ必要ヲ認メ、國自體ノ意思ニ依リ、國有林施業ノ制限ヲ爲スモノ尠カラス。卽チ、國有林ニシテ名所舊蹟ノ風致維持、學術ノ參考、保護鳥獸ノ蕃殖、淡水生動物ノ養殖等ニ關係アルモノ及林內ニ於ケル珍奇ナル植物、名木其ノ他天然記念物等ノ

如キ、之カ永遠ニ保護シテ、社會公共ノ要望ニ順應セシムルノ必要ヲ認メタルモノニ對シ、大正四年六月後記ノ依命通牒ヲ發シ施業案編成ノ際、保護林ヲ設定シテ準施業制限地ニ編入シ、大略伐採ヲ禁止スルノ外、道路ノ開通、道標ノ設置等適當ナル施設ヲ計畫シツヽアリ。而シテ、大正十年十月末迄ニ設定セル保護林ハ合計四十八箇所、此ノ面積三萬四千六百三十七町歩ニ達セリ。其ノ内譯左ノ如シ。

保護林種類別箇所面積表

種別 大林區	學術參考 箇所	學術參考 面積	風致維持 箇所	風致維持 面積	名所舊蹟保存 箇所	名所舊蹟保存 面積	享樂地保存 箇所	享樂地保存 面積	高山植物保存 箇所	高山植物保存 面積	名木保存 箇所	名木保存 面積	合計 箇所	合計 面積
青森	六	一、六四七、六四	—	—	一	四四、九一	一	七、七〇、四〇	三	二、八五七、六九	—	—	一三	一三、三二〇、六四
秋田	—	—	二	一八〇、四六	—	—	—	—	—	—	—	—	二	一八〇、四六
東京	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
大阪	五	五、〇九一、二九	—	—	—	—	一	二、二四四、四〇	二	三、六一五、〇二	—	—	三	一三、七五一、四二
高知	五	三九九、八二	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	八	四、四八七、一九
熊本	二	六八七、九六	四	三七八、八六	一	一七、三〇	—	—	—	—	—	—	五	三九九、八二
鹿兒島	五	一、九七七、三三	二	一一七、三四	一	二七、四八	二	一六三、六三	—	—	—	—	七	九八四、〇二
計	二四	九、〇二二、八四	八	五六、七八	六	五六、七八	四	一九、〇七八、四三	五	五、四三、七二	一	〇、二〇	一一	一、五〇五、八八
備考	本表ノ箇所數ト別記ノ分ト一致セサルハ後者ニ於テ合併記述セルモノアルニ因ル											〇、二〇	四八	三四、六三七、五五

保護林設定ニ關スル件（大正四年六月七日林第一四四四號大林區署長宛山林局長通牒）

左記各號ニ該當スル森林又ハ特種ノ產物ニ對シ特別ノ保護ヲ加フルハ國有林ノ經營其ノ他公共ノ利益增進上必要ト認ムル樣ニ付施業案ノ編成又ハ檢訂ニ際シテ周到ナル稽査ヲ爲スハ勿論常時管理經營上ニ於テモ遺漏ナク注意ヲ加エラレ別紙保護林設定ニ關スル注意事項參照ノ上之カ設定計畫ニ付遺漏ナキヲ期セラレ度尤保安林ニ編入スルヲ至當トスルカ如キ程度ノモノハ左記各號ニ包含セサル儀ト了知相成度

右依命及通牒候也

記

一、原生林又ハ之ニ準スヘキ林相ヲ有スル森林若ハ其ノ他ノ箇所ニシテ學術又ハ森林施業上ノ考證トシテ必要ナルモノ

二、汽車汽船其ノ他主要ナル道路又ハ地點ヨリ望見シ得ル林分ニシテ著名ナル靜景地ノ風致ヲ保持助長スルカ爲必要ナルモノ

三、名所舊蹟ノ風致ヲ保持助長スルカ爲必要ナルモノ

四、公衆ノ享樂地又ハ將來公衆ノ享樂地トナルヘキ見込充分ナル箇所ノ風致ヲ保持助長スルカ爲必要ナルモノ

五、奇記傳說ニ依ル名木及未タ人目ニ觸ヱセサルモ其ノ形態、大サ、樹齡又ハ樹種等ニ於テ名木ニ準スヘキモノニシテ風致又ハ學術ノ考證上必要ナルモノ

六、高山植物ノ生育セル區域ニシテ學術ノ研究上必要ナルモノ

七、學術研究又ハ其ノ他ノ目的ニ依リ保護ヲ要スル鳥獸ノ蕃殖上必要ナルモノ

八、醫藥又ハ工業用ノ特殊ノ植物及學術又ハ經濟上最必要ナル土石ノ保存若ハ淡水生動物養殖上必要ナルモノ

（別紙）保護林設定ニ關スル注意事項

一、各號ニ該當ノ箇所選定ニ付テハ其ノ事由ノ顯著ナルモノノミニ限ルハ勿論憲考慮ノ上疎漏ニ流レス濫設ニ陷ラサル樣注意スルコト

一、面積ハ其ノ目的ヲ達スルニ差支ナキ範圍内ニ於テ最小限タラシムルコト

一、第一號、第六號及第七號ニ該當スル保護林ノ如キハ可成未利用林、除地又ハ他ノ事由ニ依リ施業ノ制限ヲ要スル部分ニ選定シ普通施業地ノ減少ヲ避クルニ努ムルコト

一、保護林審査ヲ所轄小林區署ニ偏付ケシメ設定ノ目的、設定ノ年月、設定當時ノ現況、施業ノ沿革、設定後ニ於ケル地況林況ノ變化及其ノ他參考トナルヘキ事項ヲ記載セシムルコト

一、保護林ノ設定ハ施業案ノ編成又ハ檢訂ニ際シテ之ヲ爲スコトトシ若シ第一施業期所伐採豫定箇所ニ於テ保護ヲ要スルカ如キモノアリトセハ相當手續ヲ經テ伐採見合ノ手段ヲ採ルコト

一、保護林設定ニ關スル各種ノ事項ハ詳細之ヲ施業案說明書ニ掲記スルコト

進テ第一號第六號及第七號ニ該當スルモノニ付テハ施業案ノ編成又ハ檢訂ヲ待タス此際管内ニ洩レ一應調査ノ上別紙樣式ニ依リ據メ本官ヘ打合相成度

保護林設定見込箇所調表

事業區名	林班	小班	見込面積	設定ノ目的	摘要

事業區設定未濟ノ箇所ニ在リテハ國、郡、村、大字、字等ヲ事業區名、林班及小班欄ニ記載スルコト

其三、水源ノ涵養

歐洲ノ大戰以來、產業物與ノ結果トシテ、食糧、燃料、動力等ニ關スル問題ノ解決ヲ促シ、就中、水力電氣ノ如キハ俄ニ企業ノ隆昌ヲ見ルニ至レリ。其ノ然ル所以ノモノハ、我國ノ地勢、氣象等ノ關係上、自ラ之ニ向ハシメタルモノナルヘシ。從テ今後水道ノ給水、耕地ノ灌漑問題ト合セテ、其ノ水源ニ重大ナル關係ヲ有スル國有林ニ於テモ、經營ノ當初豫メ特ニ考慮セサルヘカラサルコトトナレリ。依ツテ政府ハ大正十年九月各大林區署ノ施業案主任技師ヲ山林局ニ會同シ、之ニ對スル討議ヲ爲シ、多少末了ノ問題アリタルモ、差詰メ水源林ノ施業案編成ニ關シ、左記ノ注意ヲ拂フコトニ決定セリ。

甲、水源ニ屬スル國有林ノ施業上注意スヘキ事項

（一）國有林ノ一般水源林ニ對スル關係程度

一流域內ニハ御料、國有、公私有等所有ヲ異ニスル林野ノ分布スルハ一般ノ狀況ナルニ水源涵養ノ問題ハ流域內全森林ノ施業ニ關係アルヲ以テ是等ヲ綜合シテ合理的施業案ヲ編成スルヲ理想トスルモ、多クノ場合ニ於テ事情ノ許サヽルモノアルニヨリ、大體事業區ヲ基本トシ、次記各號ヲ參酌シテ國有林ノ當該流域ニ對スル水源涵養上ノ關係程度ヲ達觀シ將來ニ對スル施業計畫ヲ按配スルコト

（イ）河川ノ一般的觀察

（例ハ流域ノ形狀、流路、勾配、河床、河岸等ノ狀況、水害程度、河川ノ變遷、土砂流出ノ模樣、增水、減水ノ時季及其ノ流水量等）

（ロ）水源涵養ノ目的

（例ハ發電所規模、灌漑區域及池沼、耕地宅地等ノ分布狀況、戶數人口及所要水量等）

（ハ）流域內河川水利上ノ沿革

（例ハ水利組合、耕地整理組合其ノ他水利權ノ關係等）

（ニ）流域內所有別山林原野面積、林況、地況ノ概要及其ノ施業狀況

（例ハ從來ノ伐採、搬出、造林、狀況等）

（ホ）流域內各種保安林ノ面積並分布狀況

（ヘ）流域內砂防指定地、開墾禁止制限地、荒廢復舊地等ノ面積及治水工事ノ狀況

（ト）國有林ノ水源涵養狀況

（例ハ編成當時ノ流水量ノ概數等）

（チ）國有林以外ノ森林ノ施業ニ關スル改善意見

（二）國有保安林ノ編入解除

（イ）水源林ニシテ次記各號ノ一ニ該當スルモノハ保安林ニ編入スルコト

（1）森林ノ狀態其ノ宜シキヲ得ス特ニ積極的ニ改良ヲ計ル必要アルモノ

（2）水利ニ關スル顯著ナル公益ノ爲水源林トシテ特定シ其ノ保護ヲ嚴重ニスル必要アルモノ

（3）土砂扞止及地被ノ保護ニ重キヲ置キ其ノ使用收益ヲ禁止シ又ハ制限スルノ必要アルモノ

（ロ）既ニ保安林ニ編入ニ當リテ其ノ編入面積及施業法ニ付嚴密ニ（一）ノ各項ヲ考慮シテ之ヲ定ムルコト

（ハ）既ニ保安林ニ對シテハ（一）ノ各項ヲ考慮シテ其ノ編入面積及施業法ヲ檢討スルコト

（二）其ノ他ノ事項

乙ノ事項ヲ參酌スルコト

乙、水源涵養ニ重大ナル關係アル國有林ノ施業上注意スヘキ事項

第一、森林調査ニ關スル事項

(一) 一般ノ氣象調査ヲ一層精密ニシ且之ニ關スル綜合的觀察ヲ爲ムコト

(二) 地況並林況調査ニ當リテハ流域別ニ付特ニ次記各號ヲ精査シ現在ニ於ケル流水量ノ狀態ヨリ將來ニ於ケル水源涵養上ノ効果ヲ觀察スルコト

(イ) 林地ノ方向、傾斜及土質等

(ロ) 基岩ノ構造、斷層ノ狀態、地層ノ走向、傾斜(例ハ向斜層、背斜層等)溪谷ノ種類(例ハ縱谷、橫谷等)ト溪ノ狀態等

(ハ) 地被物ノ保水狀況(例ハ落葉枯枝蘚苔等ノ厚サ林地ノ乾濕等)

(二) 林相別、齡級別面積及立木ノ保水狀況等

第二、施業仕組ニ關スル事項

(一) 樹種

樹種ノ選定ニ當リテハ次記各號ヲ參酌スルコト

(イ) 林地ニ最モ適スルモノナルコト

(ロ) 其ノ他ノ事項

(1) 森林ヲ爵閉スルコト早クシテ强ク且爵閉ヲ持續シ得ヘキモノナルコト

(2) 包水量ノ多キ地被ヲ可成多量ニ生シ易キモノナルコト

(3) 深根性ニシテ根量多キモノナルコト

(4) 葉面ノ蒸發量少ナキモノナルコト

(二) 作業種

作業種ノ選定ニ當リテハ特ニ次記各號ヲ參酌スルコト

(イ) 成ルヘク林地ヲ裸出セシメサル作業種ヲ選定スルコト

(ロ) 成ルヘク混淆林分ヲ造成スルノ取扱トスルコト

(ハ) 經濟上又ハ技術上ノ事由ニ依リ已ムヲ得サル場合ノ外成ルヘク禁伐ノ取扱ヲ爲ササルコト

(ニ) 水道水源林ニアリテハ混牧作業又ハ混農作業ヲ採用セサルコト

(ホ) 施業ヲ制限スヘキ林地(例ハ風衝地、急峻地、岩石地、頽雪或ハ崩壞ノ虞アル箇所等更新困難ナル林地)露露ヲ生シ易キ山岳湧泉地域等ヲ調査シ施業上實行ノ精確ヲ期スルコト

(三) 輪伐期及整理期

(イ) 輪伐期ハ林木ノ生長爵閉等ノ關係ニ依リ間接的効用ノ減退シ始ムル時期ヲ標準トシ直接的効用ノ關係ヲモ考慮シテ之ヲ定ムルコト

(ロ) 整理期ハ特殊ノ事情ニ基ク場合ノ外之ヲ選定セサルコト

(四) 伐採列區及伐區面積

(イ) 伐區面積ハ更新ノ安全ナル程度ニ小ナラシムルコト

(ロ) 獨立セル水源地ニ對シテハ小流域ト雖成ルヘク別個ノ列區ヲ設置スルコト

第三　施業方法ニ關スル事項

(一) 利用

收穫豫定ニ關シテハ次記各號ニ注意スルコト

(イ) 伐採及運材

(1) 間伐離伐等ノ計畫ヲ立案シ其ノ方法時期等ヲ明ニスルコト

(2) 運材、集材ニ關シテハ地表、護岸等ノ保護方法ニ付明記スルコト

(例ハ放流、山落シ、土橋出シ等ニヨリ林地溪谷等ヲ破壞シ去ルカ如キ運搬方法ノ制限等)

(4) 地況調査ニ於テ區分シ得サル小面積ノ除地、制限地ヲ指摘シ伐採ノ禁止又ハ制限ヲ嚴密ナラシムルコト

(4) 成ルヘク官行斫伐ヲ計畫シ跡地更新ノ安全ヲ期スルコト

(ロ) 副産物ノ採取

根株、土石、切芝、小柴、下草、落葉等ノ採取ハ成ルヘク禁止又ハ制限スルノ要否ヲ定ムルコト

(二) 森林土木

土木豫定ニ關シテハ次記各號ニ注意スルコト

(イ) 道路ノ開設維持修繕ニ付テハ特ニ土砂扞止、崩壞防止ニ關スル注意事項ヲ明記スルコト

(ロ) 崩壞地ニ對シテハ砂防工事、砂防植栽等ニ付企畫スルコト

(三) 造林

造林樣定ニ關シテハ次記各號ニ注意スルコト

(イ) 地拵及植栽

(1) 成ルヘク火入、燒拂等ニヨル地拵ヲ禁止スルコト

(2) 地拵ニヨル除却物ハ適當ニ處置スルコト

(3) 地拵ノ際林地ノ搔起ヲ必要トスル林分ニ在リテハ其ノ方法時期等ヲ明記スルコト

(4) 未立木地散生地ニハ成ルヘク速ニ造林スルコト

(5) 人工更新ニ依ル林分ニ在リテハ成ルヘク密植主義ヲ採ルコト

(6) 母樹、保護樹ノ殘存、下木植付等ニ付企畫スルコト

(ロ) 手入及撫育

(1) 天然更新ニ依ル林分ニ在テハ前生樹、萠芽、分蘖等ノ撫育ニ一層注意スルコト

(2) 手入ニ付テハ混生副林木ノ取扱ニ注意スルコト

(3) 撫育ニ付テハ其ノ方法時期等ニ一層注意スルコト

(4) 禁牧林ニ對シテモ常ニ適當ナル手入及撫育ノ注意ヲ怠ラサルコト

(ハ) 其ノ他造林ニ關スルコト

集材等ニヨリ生シタル小崩壊地ニ對シテハ造林ノ際簡易ナル編柵工等ヲ施シ適當ナル樹種ノ植栽ヲ計畫スルコト

(四) 森林保護

(イ) 水源涵養林ニアリテハ積極的ニ健全ナル林相ノ形成ヲ期スルト共ニ消極的保護方法ニモ一層ノ考慮ヲ要スルコト

(例ハ防風、防蟲樹帶、防火線等ノ保護設備ノ完成)

(ロ) 鑛業及精煉事業ニ對スル取締狀況ニ注意スルコト

(例ハ土石、鑛滓棄場、採鑛並鑛石運搬方法、精煉方法等ノ適否及鑛烟、鑛水害ノ狀況等)

(ハ) 開墾、燒畑、畑作等ヲ制限又ハ禁止スルコト

第四、其ノ他ニ關スル事項

地元關係其ノ他各種ノ地方的事情等ニ依リ施業上豪ルヘキ影響ヲ考慮スルコト

第二節　開墾適地ノ調査及處分

大正二、三年ノ交ニ於テ調査シタル國有林野中ノ開墾適地ハ、八萬五千五百四十一町歩ナリシモ、右ハ實地ニ於ケル大體ノ視察ヲ主トシ、之ニ一部分、他ノ調査資料ヨリ蒐集シタル計數ヲ加ヘタルモノニシテ、換言スレハ國有林野中ニ若干ノ開墾適地ヲ包含スルヤ否ヲ知ラムトスル概數ニ過キス。從ツテ、其ノ實地ハ開墾ニ適セス、若ハ開墾ニ適スルモ、當該地方ノ產業上、牧畜ノ爲ニ使用スルヲ必要トスルカ爲、該適地面積中ヨリ除外スヘキモノアリ。又新ニ、適地ニ編入スルヲ至當トスルモノアリシカハ、大正九年中加除修正ヲナスノ目的ヲ以テ、更ニ再調ヲナセリ。其ノ成績ハ

不要存置林野ノ内	一二、一〇八町歩
要存置林野ノ内	四六、三一五町歩
計	五八、四二三町歩

ニシテ、前調査ヨリ約二萬七千町歩ヲ減スルニ至リタリ。之レ不要存置林野中、一般ノ賣拂處分ニ依リ漸次拂下ヲ了シ、自然除去ヲ要スルモノ一萬三千町歩ヲ生シタルト、要存置林野中ニモ事實開墾ニ適セサルモノ、其ノ他放牧採草等ノ關係ニヨリ、除去ヲ要シタルモノアリシ結果ナリトス。而シテ、開墾ヲ條件トスル賣拂豫約處分ノ内、比較的面積ノ大ナルモノヲ擧クレハ、左ノ如シ。

所在地方	國有林名	反町別	開墾成工期限	開墾者
長野縣東筑摩郡	小倉	五六二、六三〇四	十ヶ年	小倉村外六ヶ村
同	波多	一一二、九〇〇〇	五ヶ年	波多村
群馬縣邑樂郡	館林	四三一、三六〇〇	七ヶ年	六ヶ郷村外三ヶ村

又賣拂豫約ノ處分ニ依ラス、國有林野法第十一條ニヨリ貸付スルモノニ付テハ、開墾ノ目的ヲ以テスルモノト否トヲ問ハス、賃借權ノ登記ハ其ノ必要ヲ認メサリシノミナラス事實登記申請ノ請求ヲ爲シタル者ナク從テ登記シタルコトナカリシモ耕地整理法第二條ノ二ニ依リ登記シタル賃借權者ハ、土地ノ所有者及賃貸人ヘ同意ヲ得ルニ於テハ、自ラ耕地整理施行者又ハ同組合ノ組合員ト爲ルヲ得ル便宜アルヲ以テ、實地カ永ク農耕地トシテ開放セラルヘキ適地ノ貸付ニ付テ、國有林ノ管理經營其ノ他處分上支障ナキ場合ニ限リ、耕地整理施行ニ同意ヲ與フ前提ノ下ニ、登記請求ニ應スルノ途ヲ開キ、左記通牒ヲ發セラレタリ。

賃借權登記ニ關スル件（大正八年一月林第一三六號各大林區署長宛山林局長通牒）

農耕地トシテ貸付シタル國有林野ニ對シ、借受人ヨリ耕地整理法第二條ノ二ニ依リ、自ラ整理施行者又ハ耕地整理組合ノ組合員トナリ耕地整理施行ノ目的ヲ以テ、賃借權登記ノ請求ヲ爲シタルトキハ、其ノ貸付地ガ相當貸付期間殘存スル開墾適地調査箇所ナルカ、又ハ永ク耕地トシテ供用セシムル見込箇所ナルニ於テハ、耕地整理施行後ノ換地ヲ貸付地ト略々同一位置ニ於テ交付スルコトヲ、共同施行者又ハ耕地整理組合若ハ其ノ設立申者カ承諾シタル場合ニ限リ、該請求書ヲ受理シ、登記嘱託前、事由ヲ詳具シ、本官ヘ協議相成度尚右ニ依リ登記ヲ了シタル箇所ニ對シ耕地整理法第二條ノ二ニ依ル同意ノ出願並耕地整理施行地區編入ノ申請アリタルトキハ明治四十四年本省訓令第二十二號ノ規定ニ依ラス貴官限認許相成可然依命此段及通牒候也

第三節　産物ノ特別處分

歐州大戰ノ影響ハ、一般ノ物價及勞銀ノ暴騰ト共ニ、全國ノ商工業ニ對シ、尠ナカラサル活氣ヲ與ヘ、爲ニ人口ハ都市ニ集注スルノ現象ヲ呈シ、俄然住宅ノ不足ヲ感シ、各地方ハ勿論、政府ニ於テモ、之カ緩和ヲ圖ルノ必要ニ迫マラレ、六大都市其ノ他各府縣公共團體ニ於テ、各適當ノ施設ヲ爲サムトシ、內務省モ亦是等ニ對シテ低利資金ノ融通ヲナスニ至レリ。而シテ、木材ノ價格ハ、日ニ漸騰シ住宅供給上、益々困難ヲ感スルノ傾向顯著タルモノアリシヲ以テ、農商務省ニ於テモ之カ需要供給ノ關係ヲ圓滑ナラシメムカ爲、應急住宅用材ニ對シテ、國有林生產ノ柚材及挽材ノ供給ヲ計畫シ、其ノ生產數量幷一般木材業者ノ關係ヲ顧慮シ、府縣其ノ他團體ニ於テ、前記低利資金ノ融通ヲ請ケテ施設セムトスルモノ及私人ノ經營中、公益法人トシテ永ク之ヲ保持スルカ、又ハ竣工後公共團體ニ寄附スル等、公共ノ爲之ヲ貸付スルモノニ限リ、其ノ要望ニ應シ所要數量ノ約半數ヲ限度トシ、供給スルノ方針ヲ執リ之カ處分ヲ實行セリ。

又住宅組合法若ハ產業組合法ニ依ル組合ノ住宅用材ニ付テハ、一般處分上ノ關係ヲ考慮シ、林區署ノ處分上支障ナキ程度ニ於テ相當便宜ヲ圖リ、普通處分ニ依リ、適宜供給ヲ圖ルヘキコトトナレリ。木炭ニ付テモ、亦大正七年度以來諸物價ノ昂騰ニ從ヒ、著シク昂騰ヲ來シタルヲ以テ、之ヲ調節シ、一面ニ於テハ、一般需要ノ關係ヲ圓滑ナラシメン爲、銳意官行製炭ノ增加ヲ圖リ、從來引續キ受給關係ヲ有スル官廳公共團體其ノ他ノ所要分ハ、豫テ處分シ來レル量ヲ限度トシテ供給シ、其ノ以外ハ之ヲ備蓄スルト共ニ、東京大阪ノ二大都市ヲ初メ、公共團體其ノ他ニ於ケル調節上ノ需要ニ應セリ。然ルニ、大正九年度ニ及ヒテハ、一般經濟界沈衰ノ爲、木炭ノ需要量ハ、幾部ノ減少ヲ來スヘク豫想セラルルモ、一面山地ニ於ケル勞銀其ノ他材料品ノ價格ハ依然低落セサルノミナラス資金ノ融通圓滑ヲ缺キ且需要期ニ於ケル市價ノ下落ヲ危虞シ、一般ニ製炭手控ノ傾向アリテ、其ノ生產量ヲ亦減少スヘク、需給關係ハ未タ樂觀スル得サルモノアリシヲ以テ、官行製炭ハ大正七年以來ノ方針ニ依リ、生產增加ニ力メ、爲ニ調節ト少ナカラサル効果ヲ奏セルモノトス、

以上住宅用材及木炭ノ供給ハ、現在ニ於テモ尙其ノ必要ヲ感シ、引續キ實行中ニアリ。今大正九年度迄ノ成

受給者	東京府住宅協會	東京府小松川町
材積	一、三六八	一、三三一
八年度	一、四〇五	一、三四〇
金額	一、一五四円	一、一五四円
材積	一、三四〇	一、三四〇
九年度	一、四〇五	一、四〇五
金額	一、一五四円	一、一五四円
材積	一、三四〇	一、三四〇
十年度	一、四〇五	一、四〇五
金額	一、一五四円	一、一五四円
材積	四、〇四〇	四、〇四〇
計	四、二一五	四、二一五
金額	三、四六二円	三、四六二円

受給者別住宅用材特別處分數調

受給者	鹿児島	熊本	高知	大阪	東京	秋田	青森	林區	計
材積	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇
八年度	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇
金額	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円
材積	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇
九年度	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五
金額	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円
材積	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇
十年度	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五
金額	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円
材積	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇
計	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五
金額	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円

備考　材積ハ立方米ノ小數ハ切捨テ金額ハ切捨テ円位ノ小數ハ切捨ル

林區署別住宅用材特別處分數調

受給者	平塚多賀谷	大阪治垣	岐阜卓見	静岡戸塚	名古屋	大阪	横浜	大阪西	栃木方	足利	宇都宮	弘前	秋田	山形	高崎	前橋	青森	仙台	金沢	横浜	山下	女子大學	大學
材積	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇
八年度	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五
金額	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円
材積	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇
九年度	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五
金額	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円
材積	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇	一、三四〇
十年度	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五	一、四〇五
金額	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円	一、一五四円
材積	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇	四、〇四〇
計	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五	四、二一五
金額	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円	三、四六二円

年度	七年度分		八年度分		九年度分		合計	
區別	普通用特別用	計	普通用特別用	計	普通用特別用	計	普通用特別用	計
青森	一	一	一	一	一	一	一	一
秋田	一	一	一	一	一	一	一	一
東京	一	一	一	一	一	一	一	一
大阪	一	一	一	一	一	一	一	一
高知	一	一	一	一	一	一	一	一
熊本	一	一	一	一	一	一	一	一
鹿兒島	一	一	一	一	一	一	一	一

自大正七年度　至同九年度　官有木炭生産及處分額調

年度	七年度分		八年度分		九年度分		合計	
區別	普通用特別用	計	普通用特別用	計	普通用特別用	計	普通用特別用	計
青森	一	一	一	一	一	一	一	一
秋田	一	一	一	一	一	一	一	一
東京	一	一	一	一	一	一	一	一
大阪	一	一	一	一	一	一	一	一
高知	一	一	一	一	一	一	一	一
熊本	一	一	一	一	一	一	一	一
鹿兒島	一	一	一	一	一	一	一	一
計	一	一	一	一	一	一	一	一
備考								

第三編　北海道及新領土ニ於ケル森林經營

第一章　北海道

第一節　維新後ノ林政沿革

維新以前ノ北海道産業ハ、主トシテ漁業ニ在リシヲ以テ、林政ニ就テハ殆ント見ルニ足ルモノナキモ、江差地方一帶ニ繁茂セル羅漢柏山（檜山ト稱セリ）ニ對シテハ、延寶六年中、松前藩ニ於テ制令ヲ發シ、山林濫伐ヲ防止セルコトアリ。當時、山師輩（古文書ニハ常ニ山師ノ二字ヲ用ヒアリ）他國ヨリ渡來シ、盛ニ立木ヲ伐採シテ、角材、寸市、板材等ト爲シ、輸出シタルモノノ如ク、藩ニ於テモ亦多額ノ運上金ヲ納付セシメ、之ヲ許可シタルモノニシテ、コノ制度ノ施行ハ、時ニ依リ消長ナキニ非ラサリシモ、久シキ間繼續セリ。其ノ後、函館、福山、江差地方海岸附近ノ山林ハ、多年ノ濫伐ト山火ノ爲、荒廢ニ傾ケルヲ以テ、函館奉行其ノ植樹ヲ奬勵シ、大ニ保護ヲ加フル所アリタルモ、幕府ノ末造ニ及ヒ、國事日ニ多端トナリ、且邊警ノ急ヲ傳フルニ至リシ爲、林政ニ關スル施設、全ク弛廢スルニ至レリ。

開拓使設置後、專ラ移民ヲ奬勵シ、拓殖ヲ以テ、主要政務ト爲シ、土地ノ官民有ヲ分チ、又森林地ト開墾地トノ區別ヲ立ツルノ必要ヲ生シタルノミナラス、時勢ノ進歩スルニ伴ヒ、次第ニ森林ノ保護經營ヲモ必要トスルニ至リシ爲、北海道廳ニ於テハ、明治四十一年度以後ノ繼續事業トシテ、管内國有林ノ整理計畫ヲ樹立シ、現ニ其ノ實行中ニ在リ。而シテ、維新以後該計畫ニ至ルマテノ變遷ハ、左ノ年表ヲ以テ一覽ニ便セムトス。

沿革年表

年號月日	施設類別	事項	要項
明治元年四月		函館裁判所設置	
明治二年七月		開拓使設置	
同七月		開拓地付與	
同八月		蝦夷ヲ北海道ト稱シ支配地ヲ定ム	
同九月		函館ニ開拓使出張所設置	
同十月		根室ニ開拓使出張所設置	
同十一月		小樽餘市村ニ開拓使假役所ヲ設ク	
同十二月	管内達	材木亜欄木ノ津出役ヲ定ム	
明治三年九月	布達	材木稅則ヲ定ム	
同十		太政官中ノ局ヲ廢シ東京ニ開拓使出張所ヲ設ク	函館ニ位置シ松前藩封域東木古内ヨリ西乙部迄ノ管轄ス、其後或ハ府ト稱シ或ハ縣ト改メタルモ者一時的ニシテ、明治二年六月松前氏藩籍返上ノ事アルヤ開拓使ヲ置ク
明治四年二月	達	ドロノ木並木伐木禁止	
同	同月	木材無稅ノ部分ヲ定ム	
同	三月 達	野火禁制	
同	五月	開拓使廳設置	局ヲ民部省中ニ置キシカ同年八月大政官ニ移ス 蝦夷開拓志願者ニ土地ヲ付與スルコトトナレリ 全道ヲ分チテ十一函八十六郡トシ各府藩寺院及士族等ノ支配地ヲ定ム

第三編　北海道及新領土ニ於ケル森林經營

札幌市在役人ニ達シタルモノ

札幌郡中ノ者、郡中使用ノ材木薪炭藁トモ稅役免除ノ旨通達セリ輸出ヲ爲スモノハ八分稅ヲ取立ツ

札幌市在役人ニ達シタルモノ

札幌ニ開拓使廳ヲ置キ、函館根室ニ兩出張所ヲ置キ出張開拓使廳ト改稱ス

本規則ハ函館、蝦夷、藩都、手宮海關所規則中ニ定メタルモノニ程シテ炭薪ハ他國輸出停止ノ但書アリ

郡ニ於テ材木願受ノ者ハ免判相渡土場着相改メ七月十二月兩度ニ稅取立テ材木ハ材木柾撓榻皮樺皮薪ニシテ其時ノ相場ニテ一割取立ツルコトトス

明治四年　八月　支配地廃止

明治五年　七月　函館支廳布達　願濟貝前ノ伐採木禁止

同　九月　廳名改稱、出張所設置

明治六年　二月　宗谷支廳ヲ留萌ニ移シ留萌支廳ト稱ス

同　三月　山林假規則ヲ定ム

同　六月　同　樺皮著提樹濫ニ剝取ルヲ禁ス

同　十一月　本廳布達　山林事務分掌改定

同　十一月　本廳達　望月厚別他六所(札幌附近)ノ森林ヲ官林ト定ム

明治七年　一月　本廳達　伐木規則ヲ定ム

同　四月　火入取締布令

同　同月　日新眞事誌ニ掲載セル開拓使ノ森林經營意見

同　十一月　山林取締方ノ件

明治八年　三月　留萌支廳ヲ廢ス

同　八月　本廳達　大河川西岸一里以内ノ伐木禁止

同　十一月　出張所ノ派出所ヲ分署ト改稱

省府藩寺院支配地ヲ舉ケテ開拓使ニ隷セシム

(札幌開拓使廳ヲ本廳ト稱シ函館根室浦河宗谷ニ支廳ヲ置キ各所ニ出張所ヲ置ク)

(本規則ハ函館支廳管内ニ施行セルモノ、山火ノ豫防消防植樹奬勵伐木免判山林係ノ巡視等ヲ主トシテ規定ス)

元工業局營繕係ニ分掌セシメタル山林事務ヲ民事局ニ移ス

(官林トハ官營工事用材ノ伐採ヲ行ヒ又人民ニ伐採ヲ許ササル個所ノ意ナルカ如シ)

(本規則ヲ定ルト共ニ從來工業局ニ於テ取扱ヒシ林木伐採取締事務ヲ民事局ニ移セリ、當時森林ノ取締ハ開拓使廳所在地即札幌附近ニ行渉リタルニ過キサリシカ如シ)

本廳所在地即チ札幌郡ノ正副局長ニ令達セルモノナリ

(日新眞事誌ニ開拓使施政ニ對スル攻擊ノ扱書アリ之ニ對シ釋明ヲ爲シタルモノ)

(從來ハ山林取締ノ爲特ニ取締人ヲ設ケ置キタルカ如キモ、此令達ニ依リ正副戸長ノ任務ト爲レリ、本令達ハ室蘭出張所トアルモ一般ニ對シテモ亦此方針ニ出デタルモノナルヘシ)

(本令達ニ於テ地方官ノ許可ヲ受ケトアル地方官ト、當時本廳ノ下ニ各所ニ設ケアリシ出張所所長ヲモ地方官ト稱シタルカ如シ)

(明治年九月二十五日ニ根室支廳ニ於テ同樣ノ布達アリ此方針ハ全道ニ行ハレタルモノト思ハル)

(從來出張所ノ下ニ事務ヲ所理セシメタル派出所ヲ分署ト改稱シタルモノナルヘシ)

明治九年　二月　乙第二十九號本廳達　山林取締事務民事局地理課ノ擔當トス

同　四月　本廳達　伐木炭運稅ヲ廢ス

同　五月　渡島國檜山郡五厩手ノ檜山ニ大山火アリ

同　同月　丙第五〇號　山火消防令達

同　同月　乙第三號　桑樹伐採禁止

同　八月　達　森林取締ノ制札

同　十一月　乙第十一號布達　北海道鹿獵規則制定

明治十年　二月　札幌農學校教頭「クラルク」氏ニ北海道林政ニ付キ質問シ其答辯ヲ得タリ

同　同月　丁第一號　薪炭材ト爲スヘカラサル樹木ヲ定ム

同　三月　第十三號達　記號使用令達

同　四月　丁第十號達　山林保護條例ヲ定メ山林官ヲ置キ同時ニ林木拂下規則ヲ定ム

同　五月　室蘭分署所轄ニ山林監守人三名小樽分署所轄ニ同五名ヲ置ク

同　七月　第七十一號布達　官林林木拂下規則炭燒營業規則ヲ定ム

(本達ハ根室支廳ノ發令ニ係ルモノナルモ一般取締ノ方法ヲ窺フ好資料タルヘシ)

本規則ヲ制定シ亂獲ヲ戒ム

(五月九日ヨリ二十三日ニ亘リ燒損セル檜木三十四萬五千八百五十本雜四十四萬三千百本ニ及ヘリト云フ)

質問十四ヶ條ニ渉リ「クラルク」氏ハ一々之ニ答辯セルモノナリ

本達ハ建築用材保存ノ必要ニ出デタルモノナルヘシ

本令ハ蓋シ記號使用令達ノ濫觴タルヘシ

(本條例ハ一般的ノモノニアラスシテ本廳ドノ區戸長總代ニ限リ令達シタルモノ、如シ)

(森林ヲ官林公林邑林私林ノ四種トシ私林ヲ除ク外管轄廳又ハ山林官ノ許可ナクシテ斬伐スルコトヲ禁シタリ)

(當時山林官ナルモノヲ設ケ其ノ下ニ監守人ヲ置キタルモノ、如シ從來伐木ノ爲徵シタル稅金ハ本令ニ依リ定價ト改メタリ)

(本規則ハ函館廳ノ發布ニ係リ、前ノ本廳發布ト對照スルトキハ大體ノ方法同シキモ林務官ノ名稱等ニ於テ多少異ナリタル點アルヲ見ル即チ規則甲部發所トアルハ之レ明治十三年九月改正ノ規則ナルニヨル公林ノ伐木ハ地理課山林係ニ願書ヲ差出スヘキ規定ヲ爲セルヲ以テ山林係ナルモノノ始メテ置カレタルモノナラン)

同　十二月　第十四號布達根室支廳　山林取締假規則林木拂下規則ヲ定ム

明治十一年二月　堅樺松檜椴種子ヲ札幌試驗場ニ播種ス杉種ヲ上下平稻平岸月寒四村ニ下付ス

同　六月　第五十一號　炭燒營業規則ヲ定ム

同　六月　丁第十四號本廳達　公林ノ範圍ヲ定ム

同　八月　山林調査ハ全道總テ本廳負擔ト定ム

同　十月　開拓使達第十一號　森林監護假條例山林原野調査假條例ヲ定ム

〔私有地ニ於テ營業スル以外ノモノヲ取締ルタメ設ケタルモノナリ〕

〔本達ハ開拓使ヨリ本支廳ニ發シタルモノニシテ本道全般ニ亘ル森林制度ノ纏結ナルカ如シ、森林監護假條例ハ現ニ行ハレツヽアルモノト解セラル、本條例ハ現ニ尙有効ト認メラレアリ〕

同　同月　開拓使乙第三十三號函館支廳發　部分木仕付條例

同　十二月　開拓使達第二十七號　山林監守人規則ヲ定ム

明治十二年一月　甲第一號布達　材木拂下規則改正

同　六月　長野縣本會山舳夫ヲ屋入シ伐木及山出ノ術ヲ傳習セシム

同　七月　郡區町村ヲ編成シ區郡役所ヲ置ク

同　九月　檜山郡檜山林ノ林木圍二尺以下ノ賣拂停止

明治十三年一月　山林監吏配置ノ位置ヲ定ム

同　二月　山林監守人ノ制輔ヲ定ム

同　三月　官林中白楊青楊ノ伐採所禁止

同　四月　札幌管內山林調査ニ着手ス

同　五月　桐種子ヲ札幌育種場ニ播種ス

〔本達ニ依リ全道ニ山林監守人ナルモノヲ配置シ且其職掌ヲ一定セリ〕

同　四月　札幌郡圓山凡六萬坪ヲ育種園トシ各樹木ヲ挿殖ス

同　同月　管內材木代價收入金ノ內金七千圓ヲ支出シ山林種植及育種園等ノ費ニ充テ以後每年例トス

同　八月　山林事務管理ノ爲メ各郡ニ山林係派出所ヲ置ク

同　十月　開拓使乙第九號　部分木仕付條例ヲ定ム

同　十一月　甲第五十六號根室支廳達　林木拂下規則改正

明治十四年一月　甲第九號本廳布達　山林係派出所ノ位置管轄區域ヲ定ム

同　二月　委員ヲ各郡ニ派出シテ山林ヲ巡視セシメ郡每ニ禁伐林ヲ定ム

同　十二月　札幌本廳管下山林概況調査

明治十五年二月　開拓使ヲ廢シ函館札幌根室ノ三縣ヲ置ク

同　三月　舊開拓使事務ノ內山林事務ハ農商務省管理ト爲ル

同　九月　甲第百二十六號布達　札幌縣ニ於テ開拓使達ノ山林係派出所管轄區域ヲ改正

同　同月　第二十三號　札幌縣ニ於テ圓山育種場養成樹苗賣拂ノ廣告ヲ爲ス

明治十六年七月　丙第三十九號　札幌縣ニ於テ山林監守人心得ヲ定メ開拓使達山林看守人規則ヲ廢ス

同　八月　甲第四十四號　札幌縣ニ於テ流木取締規定ヲ定ム

明治十七年三月　甲第十一號　札幌縣ニ於テ山林係派出所ヲ林區事務所ト改稱ス

〔山林事務始メテ獨立ス〕

〔本條例ハ札幌管下ニ對スル命達ニシテ今尙有効ト認メラル〕

〔本達ハ本廳管內ノ分ノミナルモ函館根室兩支廳ニ於テモ亦同樣ノ設置アリシナラン〕

函館支廳管內各郡概況ニ錄スルトコロニ據ル

縣廳ニ於テハ勸業課ニ山林係ヲ置キ山林事務ヲ掌理ス

明治十七年四月　乙第九十五號　札幌縣ニ於テ勧業課山林係處務内規林區事務所處務心得ヲ定ム

同　九月　丙第七十八號　札幌縣ニ於テ山林係ヲ地理課ノ所屬ト爲ス

同　同月　甲第六十二號　札幌縣ニ於テ官林主副產物拂下規則ヲ定メ開拓使布達ノ拂下ニ關スル法規ヲ廢止ス

同　同月　甲第六十四號　札幌縣ニ於テ炭燒營業者ニモ布地拜借願ヲ出サシメ料金ヲ徵スルコト ニ定ム

明治十八年一月　根室縣甲第二號　部分木仕付條例ヲ定ム

明治十九年一月　官制　北海道廳ヲ置ク

同　二月　農商務大臣達　從來農商務省主管タリシ北海道山林事務ヲ北海道廳管理ニ移ス

同　四月　北海道廳達　山林事務ヲ道支廳ニ管理セシム

同　同月　同　森林監護處分ノ事務ヲ郡區長ニ委任ス

同　十二月　官制　函館根室ノ二支廳ヲ廢ス

明治二十年五月　廳令第五十一號　森林事務ノ郡區長委任事項改正　〔同時ニ函館、札幌、根室ノ三縣及北海道事業管理局ヲ廢ス〕〔北海道廳ノ下ニ函館根室ノ二支廳ヲ置キ元札幌縣一區域ハ本廳直轄トセリ〕

同　同月　部分林設定ハ民有ト爲シ難キ林地ニ限ルコトニ決定ス　〔前委任事項中、立木拂下範圍五百本ニ限レルヲ除ク、他ハ前ト殆ント同シ〕

同二十一年三月　廳令第十六號　道廳第二部ニ林務課ヲ獨立セシム　〔從來ハ部分林設定ヲ以テ人民ノ土地占有ニ利用シタルモノ、如シ〕

同　同　同第十七號　林務課員派出所ヲ設置ス　林務課ノ獨立ト共ニ森林事務取扱ノ面目ヲ改メタルカ如シ

同　五月　廳令第三十一號三十二號三十三號　〔十八ヶ所ニ設ケ、其首席者ニ森林事務ヲ分任シ郡區長ノ森林事務委任ヲ削除セリ、同時ニ派出所監督員ヲ特置シ監督ノ任ニ當ラシム〕　官林木特賣規則、官林雜產物特賣規則、官林產物公賣規則ヲ定ム　本規則ノ制定ニ依リ林產物處分方法稍秩序立チリ

同　五月　廳令第四十號　山野火入取締規則ヲ定ム

同　十月　廳令第六十號　諸川ニ於テ木材又ハ薪材ヲ流下セシトスルモノハ郡長ノ許可ヲ受ケシムルコトトス

同　同月　官林巡視人看守人規則ヲ定ム

同二十二年一月　告示　土石拂下手續ヲ定ム

同二十三年四月　勅令六十九號　官有森林原野及產物特別處分規則ニ準據シ北海道森林ノ處分ヲ行フ

同　八月　御料局札幌支廳及出張所ヲ設ケラル　〔官林巡視人ハ受持官林ノ巡視ヲ掌リ、官林看守人ハ官林ノ要部ノ保護ニ當ル、共ニ雇員ヲ充ツ〕

同二十四年七月　告示第十九號　林務課派出所管轄區域ヲ改ム　從來十六ヶ所ナリシヲ十四ヶ所ト爲ス

同　八月　訓第七　森林事務ヲ地理課ニ屬セシム

同　同月　告示第二十四號　地理課派出所ヲ設ケ森林事務ヲモ取扱ハシム　同時ニ林務課員派出所ヲ廢ス

同二十五年十一月　廳令第三十四號　森林事務ヲ郡區長ニ分任シ同時ニ派出所ヲ廢ス　〔各郡區役所ニ森林檢查員ヲ置キ森林事務ヲ擔任セシメ又不便ノ個所ハ戶長ニ分任ス〕

同二十六年二月　訓第三十四號　本道林制方針ノ大綱ヲ示ス

同　八月　訓第二百三十五號　各郡役所ニ於テ林地貸下ヶ及林產物拂下ノ豫算ヲ作ラシメ認可ヲ受ケシム　〔林產物處分豫算ノ編成ニ付テハ既ニ明治二十一年林務課員派出所長職務中ニ規定セラレシカ更ニ本訓令ヲ發セラレタルハ本件ヲ一層重視スルニ至リタルニ依ルモノ、如シ〕

同　九月　檜山郡内各官林羅渓柏ノ拂下ヲ停止セシム

同　十一月　告示　目通直徑三寸以下ノ林木拂下ヲ停止ス　之カ停止ハ椴松外十三種ノ優良樹種ニ限ル

同二十七年九月　廳令第四十九號五十號　北海道官有森林原野產物特賣規程　同公賣規程ヲ改正ス　機關ノ整備ト共ニ其取扱方法ニモ改善ヲ加ヘタルモノナリ

同　九月　告示　北海道官有木極印使用規則ヲ定ム　現ニ此ノ規則ヲ施行ス

附後二三ノ部分改正ヲ加ヘ今尙施行セラル

明治二十七年九月　訓令　官有森林原野産物賣渡及官林貸渡處分手續ヲ定ム

同二十八年一月　御料林中百六十餘萬町歩ヲ官林ニ還付セラル　（明治二十三年ニ道内ノ官林中約二百萬町歩ヲ御料林ト定メタリシモ今回上記面積ノ還付ヲ受ケタルモノナリ）

同　二月　訓　野幌官林伐採ヲ停止ス

同　四月　同　森林取締機関調製手續ヲ定ム

同　六月　告示　官有林境界標樣式ヲ定ム

同二十九年十月　訓　官林取締人ヲ設置ス

同三十三年四月　勅令第百二號　北海道廳森林監守ヲ置ク

同三十年六月　　假施業案實施心得ヲ定ム

同　九月　　北海道ニ關スル政務ハ内務省主管トナリ森林事務亦同省直轄トナル

同　十一月　　殖民部ニ林務課ヲ設ケ森林事務ヲ分掌セシム

同　十二月　勅令第四百五十五號　北海道保安林編入手續ヲ定メラル　（森林法中保安林ニ關スル規定ノ北海道ニ施行セラルルコトトナリタル結果本令ノ發布アリタルモノナリ）

同三十二年四月　訓令　北海道官林補別規程ヲ定ム　（拓殖ノ進歩ニ伴ヒ森林トシテ保續スヘキ部分ト開拓スヘキ部分トヲ決定スルノ必要ニ迫ラレ之レカ規定ヲ設ケラル）

同三十三年十月　訓　造林奬勵ノ爲メ試驗苗圃ノ樹苗無代下付内規ヲ定ム　國費經營ノ奬勵苗圃ニシテ今尚存續ス

同三十五年十月　　殖民部林務課派出所及分所ヲ設ク

同三十五年八月　勅令第二百七號　北海道森林及産物特別處分ノ件ヲ定ム續テ附屬法規ヲ定メラル　（派出所十五ケ所、之ヲ支廳内（明治三十六年設置、同時ニ郡役所廢止）ニ置キ、分所十四ケ所之ヲ派出所管内須要ノ地ニ置ク）

同三十六年十月　　林務課派出所同分所森林事務取扱手續ヲ定ム　（製材業機械寸軸木製造業たんにん製造業者ニ特別處分ノ途ヲ開ケタモノナリ）

同　十二月　　北海道地方費經營模範林ヲ定ム　國有林九萬町歩ヲ解除シ國有未開地處分法ニヨリテ付與セリ

同三十八年五月　　道廳ノ分課ヲ改メ森林事務ヲ林政課林務課ニ分掌シ第五部ニ屬セシム

同四十年四月　　道廳ノ課ヲ廢シ第五部内ニ林務係ヲ置キ森林事務ヲ掌理セシム同時ニ地方林業係ヲ置ク

同　四月　廳令　北海道地方費森林事務所ヲ置ク　（地方林業係ハ主トシテ北海道地方費有森林ノ管理經營ノ事務ヲ掌リ兼テ地方林業指導奬勵ノ事務ヲ掌ル）

同四十一年六月　　營林區署ヲ設ケ林務課派出所ヲ廢ス　（北海道地方費有林ノ調査保護ニ當ラシムルモノ、設置數十ケ所、其下ニ地方費森林監護員駐在所二十三ケ所ヲ置ク、現今此ノ制度ニ依ル）

同　同　　林業試驗所ヲ野幌國有林内ニ置ク

同　同　　營林區署同分署ノ設置ト共ニ森林事務ノ大綱新ヲ圖リ北海道國有林ノ事業計畫ヲ定メ續續事業トシテ之ヲ實行スルニ至レリ　（營林區署五ケ所同分署十四ケ所トシテ國有林ノ事務ヲ掌ル其下ニ保護區員駐在所百五十ケ所ヲ設ク）

第二節　國有林

古來斧斤ヲ加ヘタルコトナキ、本道内ノ蒼鬱タル森林ハ拓地殖民ノ進歩ニ伴ヒ、或ハ耕地トナリ、或ハ牧場ト化シ、漸次其ノ區域ヲ減縮スルニ至リシト雖、之ヲ本道全土ノ總面積ニ比スレハ、尚五割以上ヲ占メ、荒廢ノ觀アルモノ僅カニ一小局部ニ過キス、今ニシテ之カ長計ヲ立ツルニ非ラスムハ、幾多ノ歳月間ニハ次第ニ支離滅裂復タ收拾スヘカラサルニ至ルヤモ未タ知ルヘカラサルナリ。是ニ於テカ、明治四十年中、道廳ハ三十箇年間ノ繼續事業トシテ其ノ經營方針ヲ確立シ、國有林ノ全斑ニ亘リテ一大整理ヲ行ヒ、拓殖地及國有林、公有林、私有林ノ界域ヲ確定シ、農牧適地トシテ拓殖ノ用ニ供スル林地ヲ移シテ以テ本道ノ開發ニ資シ、國有トシテ存置スヘキ森林ニ付利用改善ノ途ヲ講シ、國土ノ保安ト林利ノ增進トヲ圖リ、其ノ他ノ林地亦適

當ノ措置ヲ施シ、各々相俟テ、國家永遠ノ富源ヲ開發セムコトヲ期セリ。北海道國有林事業計畫ナルモノ卽チ是ナリ。左ニ整理案ノ大要ヲ揭ケム。

整理案大要

明治四十年六月一日現在國有林ノ總面積ハ、約四百七十八萬町歩ニシテ、其ノ内千島國ニ屬スルモノ約五十七萬町歩ハ姑ク之ヲ除外シ、本土所在ノ約四百二十一萬町歩ニ付キ次ノ通リ整理區分ノ見込ヲ立テタリ。

一　固定國有林豫定地　二百二十八萬町歩
二　公有林豫定地　四十五萬町歩
三　私有林豫定地　三十萬町歩
四　未開地編入豫定地　六十七萬町歩
五　林種未定地　五十一萬町歩

右ノ内林種未定地五十一萬町歩ハ整理事業ノ進捗ニ伴ヒ、自ラ相當ノ林種ニ編入セラルヘキモノナルモ、現今ニ於テハ之カ見込ヲ立ツルコト能ハサルヲ以テ本計畫ニ於テハ之ヲ除算シ、殘面積三百七十萬町歩ヲ以下ノ方法ニヨリ整理スルコトトセリ。

一　約十箇年ヲ期シテ境界ヲ調査シ各種林地ノ區域ヲ確定スルコト
二　約十三箇年ヲ期シテ三角測量ヲ行フコト
三　固定國有林及公有林豫定地ニ定マリタル地域ニ對シテハ約十五ヶ年ヲ期シテ林況ヲ調査シ、大要ノ施業案ヲ編成シ且地籍ヲ定メ臺帳ヲ調製スルコト
四　固定國有林及公有林豫定地ハ施業案ノ編成セラルルニ從ヒ利用及更新ノ作業ヲ爲スコト
五　公有林豫定地ノ處分方法ハ後日愼重ニ調査ノ上之ヲ定ムルコト
六　私有林豫定地ニ定マリタル地域ハ土地立木ヲ併セテ三十箇年以内ニ賣拂フコト
七　國有未開地編入豫定地ニ定マリタル地域ハ逐次林籍ヲ解除シ未開地ニ編入スルコト
八　國有林野ノ監護經營ニ當ラシムル爲五箇ノ營林區署ヲ置キ又造林及林產利用ノ試驗ヲ行ハシムル爲林業試驗場ヲ設ケ土地及產物ノ處分ハ道廳取扱ニ屬スルモノノ外、所屬支廳長ヲシテ掌ラシムルコト

前記ノ如ク、整理經營スルノ方針ヲ以テ、各事業ニ對スル每年度實行量ノ豫定ヲナシ四十一年度以降二十箇年間ニ經費千五百十萬圓ヲ投スル見込ナリシモ、實際ノ支出ハ該豫定ニ伴ハス、加之明治四十三年以降ハ拓殖事業計畫ノ成立ト共ニ、森林收入ハ拓殖事業ノ財源ニ供セラレ森林事業費ハ別途ニ國庫ヨリ其ノ支辨ヲ仰クコトトナリ逐年經費ノ增加ヲ豫期セル當初ノ計畫ニ反シ、實際ノ支出却テ減少シ、爲ニ造林其ノ他各般ノ事業遂行上幾多ノ齟齬ヲ來タセリ。依テ大正七年度中森林事業費支出ノ方法ヲ改メ

一　大正七年度以降森林事業費ヲ拓殖費ニ編入スルコト
一　從來國庫ヨリ支辨ノ森林費ハ其ノ支出額ヲ三十五萬圓ノ定額トシテ拓殖事業費ニ加算スルコト
一　前項ノ定額以上ニ要スル森林事業費ハ拓殖費ノ自然增收ヲ以テ支辨スルコト

トシ、其ノ方針ニ依リ、既定計畫ノ改訂ヲ施シ、續テ大正八年、九年及十年ノ三箇年度ニ於テモ亦改訂擴張ヲ爲シ、現ニ著々其ノ實行中ニ在リ。

第三節　一般森林

本道ハ附屬ノ島嶼ヲ合セ、其ノ面積六千一百五十五方里、卽千九百五十七萬二千五百二十町歩ニシテ、内森林五百五十四萬九千九百六十七町歩ヲ占ム。今大正七年度現在ノ所有別内譯ヲ示セハ左ノ如シ。

御料林及同附屬地	九十萬八千九百八十町歩
國有林	三百三十九萬五千五百六十町歩
大學其ノ他ノ官有林	八萬六千四百九十七町歩
公有地方費林	五十四萬一千七百五十八町歩

社寺有林	六百五十町歩
民有林	六十一萬六千五百二十二町歩

以上ノ内、御料林ハ渡島、膽振、石狩、天鹽、釧路、日高ノ六箇國ニ跨リ、總テ、帝室林野管理局札幌支局ノ管轄ニ屬シ、出張所ヲ函館外十三箇所ニ置キ、全地域ヲ更ニ五十二分擔區ニ分チテ管理セリ。而シテ、其ノ經營ハ、明治三十一年ヨリ同三十四年ニ至ル間ニ於テ、概略ノ林況調査ヲ行ヒ、爾後之ヲ基礎トシテ假施業案ヲ編成シ、更ニ輓近本道拓殖ノ進展ニ伴ヒ、植伐計畫ノ正確ヲ期スルノ必要ヲ認メ、四十三年度ヨリ本施業案ノ編成ニ着手シ、大正五年度迄ニ四十八萬餘町歩ノ調査ヲ遂ケ其ノ大部分ハ擇伐喬林作業ヲ採リ、唯札幌團地ノ一部ニ對シテ、皆伐喬林作業ヲ採ルコトトシ、力メテ林地ノ荒廢ヲ招カサラムコトヲ期シ、常ニ消極的ノ施業ヲナスコトトナレリ。

大學演習林ハ、東京帝國大學ニ屬スルモノト、北海道帝國大學ニ屬スルモノトアリ。前者ハ、石狩國空知郡下富良野村及山部村ノ二箇村ニ跨リ、面積二萬五千九十四町歩ヲ有シ、其ノ大部分ハ、明治三十二年中國有林ノ讓與ヲ受ケタルモノニシテ、同三十九年施業準備ニ著手シ、翌四十年第一期計畫案ヲ制定シ、爾來各種ノ試驗ヲ實行ス。後者ハ、明治三十四年以來大正二年ニ至ル間、石狩、天鹽、膽振ノ各國ニ於テ、國有林面積合計七萬四千七百三十一町歩ノ讓與ヲ受ケ、之ヲ設置シタルモノニシテ、其ノ經營ハ專ラ擇伐喬林作業法ヲ採リ、造林ハ主トシテ天然生育ニ依リ、未立木地其ノ他ニ對シ、人工植栽ヲ行フコトトス。而シテ、土地ノ利用並ニ森林經營ノ目的ヲ助成セムカ爲、明治四十三年度以降一部林内ノ農耕適地ヲ區劃シテ、林内殖民ヲ實施セシニ、其ノ面積六百八十五町歩、戸數八百四十七戸ニ達セリ。

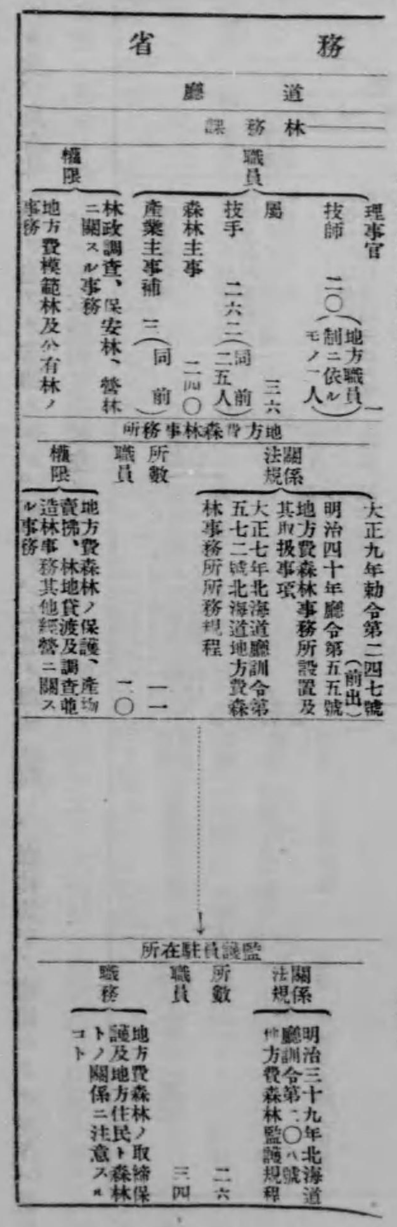
地方費森林ハ、之レヲ模範林及公有林ノ二種ニ分チ、之ニ關スル事務ハ、道廳拓殖部林務課ニ於テ主管シ、調査及監督上ノ實行機關トシテ、各地方ニ事務所十一、其ノ下ニ監護員駐在所二十八ヲ設置シ、駐在員ヲシテ直接之カ保護ニ當ラシム。而シテ、模範林ハ林業經營ノ模範ヲ示シ、兼テ地方費ノ財源ニ資スル目的ヲ以テ、明治三十九年國有林ヨリ地方費ヘ讓渡設置セラレタルモノニシテ、現在(大正九年迄)面積十八萬八千七百四町歩アリ。公有林ハ、其ノ收益ヲ區町村ニ配當シ、教育、勸業、土木及衛生等ノ資金ニ充當セシムル目的ヲ以テ、國有林四十五萬町歩ヲ地方費ニ移ス豫定トシ、明治四十四年度以降大正八年度末迄ニ讓渡シタル面積二十五萬二千八百十六町歩ニ上リ、殘餘ハ今後ノ調査ヲ俟ツテ、漸次、讓渡ノ豫定ナリトス。

本道國有林ニ付テハ、明治四十一年度以降、三十箇年間ノ繼續事業トシテ、一大整理ノ方針ヲ確立シ、現ニ之カ實行中ニ屬スルヲ以テ、該事業計畫中、私有林豫定地トシテ計上セルモノハ、年々賣拂處分ヲ續行セラルルカ故、民有林ハ年ヲ追フテ增加スヘシ。而シテ、本道ノ森林ニ對シ、森林法中ノ適用セラルベキハ保安林ノ章ノミニシテ、其ノ行政機關ノ系統左ノ如シ。

内

北海道拓殖部				
大正二年勅令第一五四號 北海道廳官制	關係官制及職員制	大正六年勅令第二二一號 拓殖及森林事務ニ從事セシムル爲北海道廳ニ臨時職員增置ノ件	營林區署	關係官制
				大正六年勅令第二二一號 拓殖及森林事務ニ從事セシムル爲北海道廳ニ臨時職員增置ノ件
			署數	四
			職員	道廳ノ職員ヲ以テ之ニ充ツ
			權限	森林原野ニ關スル事務

營林區分署				
關係官制	(同營林區署)	關係官制	(營林區署)	
署數	一五	保護區數	二四〇	
職員	道廳職員ヲ以テ之ニ充ツ	職員(森林主事)	二四〇	
權限	(同營林區署)	職務	營林及林野ノ保護	

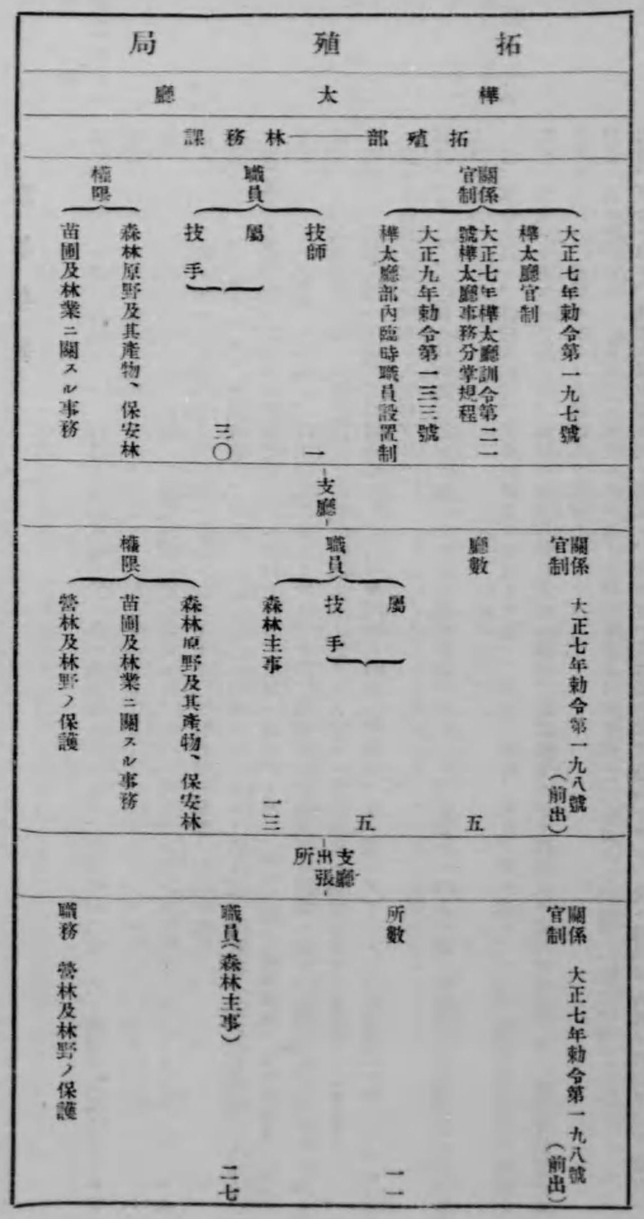


第二章 樺太

第一節 領有以來ノ林政沿革

邦領樺太ノ總地籍ハ、二千三百九十三方里、即約三百七十二萬二千町歩ヲ算シ、其ノ大部分ハ殆ント森林ニ蔽ハレ、海濱、湖潴、河川、ツンドラ帶其ノ他住宅地、道路、農圃、牧地等林地以外ノモノ、僅ニ一小部分ヲ占ムルニ過キス。而シテ樺太ノ本邦領有ニ歸シタルハ、明治三十八年ニシテ、同四十一年四月始メテ樺太廳ヲ設置セラレ、爾來漸ク十數年ノ短日月ヲ經ルニ過キスシテ、現在ニ於ケル産業ハ、主トシテ漁業、林業ノ外、製紙工業等ニ屬シ、未タ一大計畫ノ下ニ、本島ノ開發ヲ促進スルニ至ラスト雖、森林ニ付テハ、大規模ノ拂下ニ依リテ、多額ノ資本ヲ投下スルノ企業ヲ奬勵シ、或ハ特殊ノモノニ限リ産物無料採取ノ特典ヲ附與スル等、漸進的ニ拓殖ノ實蹟ヲ擧ケムコトニ注意シ居レリ。今左ニ、森林行政ニ關スル組織ノ系統及領有以來ノ沿革年表ヲ掲ケ、其ノ變遷ヲ示サントス。

森林事務官廳系統表



沿革年表

沿

明治三十八年　次

本年、樺太ノ一部ヲ占領スルヤ、八月七日陸軍省告示ヲ以テ漁業假規則ヲ定メ、同則第十二條ニ於テ漁業者及其使用者ハ管轄軍衙ノ許可ナクシテ樹木ヲ伐採スルコトヲ禁セリ、同二十八日、民政本署ヲ「アレキサンドル」ニ設キ、支署ヲ「コルサコフ」(大泊)ニ置キ、同時ニ軍令ヲ以テ山林ノ伐採並狩獵ハ新ニ許可セス、但シ一時利用ノ爲メ所轄官憲ノ許可ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニアラス、犯ス者ハ五百圓以下ノ罰金若ハ退島ヲ命ストセリ、又林産物野鳥獸ノ移出ヲ禁セリ。

九月十日、「アレキサンドル」在民政署ハ、全部「コルサコフ」ニ移轉シ十一月ヨリ市街廳舍等建設ノ爲メ亞庭灣内「アラクリ」木工場(露國ノ遺留品)ニ於テ神原技師監督ノ下ニ製材ヲ行ヒ、賣材一萬尺〆ヲ出ス、同木工場ノ器具器械ハ翌年大家某ニ貸付「ウラジミロフカ」(豐原)ニ移轉シ、後遠藤木工場トナレリ。十月、民政署告示漁業鑑札規則ニ依リ、漁業鑑札ヲ受ケタル者ハ薪炭用、住宅其他漁業ニ要スル建築及土工用並漁船漁具用ノ爲メ官ノ定ムル伐採料金ヲ納付シ山林ヲ伐採スルコト得セシム、但シ海面ヨリ展望シ得ヘキ場所、展望區域ヨリ十八町及河川ノ沿岸一町以内ハ此ノ限ニアラストス、同月初テ「コルサコフ」附近ニ於テ移住民ノ爲メ林木ヲ入札拂下ス。

同月、「コルサコフ」樺ケ枝町奥大泊川上流ニ於テ製炭原料試驗ヲナシ、一方炭竈ヲ一個五十錢ノ料金ヲ以テ移住民ニ許可シ鑑札ヲ交付セリ。

同　三十九年

一月、軍令ヲ以テ、薪材及用材、伐採請負者取締規則ヲ定メ、過伐、誤伐、濫伐ノ弊ヲ避ケ、二月、森林伐採規則ヲ制定シ、特別ノ規定ニヨルモノヲ除ク外、自家用建築用材薪炭材ニ限リ、民政長官ニ於テ區域又ハ立木ヲ指定シテ一時之ヲ許可スルコトヲ得セシメ、被許可者ニハ入林鑑札ヲ交付スルコトトス。

三月、民政署令ヲ以テ、漁業鑑札ヲ受ケタル者ノ山林伐採方及料金ヲ定ム(料金尺〆十五錢、一棚二十錢)

六月、軍令ヲ以テ、林野火災取締規則ヲ制定シ、林内若ハ其近傍ニ於テ焚火ヲナシ、又ハ林内ニ火氣ノ携帶ヲ禁シ罰則ヲ設ク。

八月、署令ヲ以テ、農村共同使用林伐採規則ヲ定メ、官有建物ノ貸付ヲ受ケタル者ハ許可ヲ得テ使用林ヲ無償伐採スルコトヲ得セシム、其用途ハ家屋、通路、橋梁ノ修理若クハ自家用燃料ニ限ルコトトス。同月、軍令ヲ以テ漁業鑑札規則ヲ改正シ、展望區域ヲ十町トス。

同　四十年

十一月、告示ヲ以テ大泊貝塚間海岸一帶ノ生立木伐採ヲ禁止ス。

四月一日、民政署ヲ廢シ、樺太廳ヲ置キ、同日廳令ヲ以テ森林原野産物賣拂規則ヲ制定ス。同時ニ、木材賣拂標準單價ヲ定メ一尺〆二十五錢一棚二十錢トス。又勅令ヲ以テ樺太漁業令ヲ發布セラレ、其第三條ニ於テ特許漁業者ハ許可ヲ得テ國有山林ニ於テ所要材ヲ無料伐採スルヲ得セシメラル。

六月、廳令ヲ以テ、極印使用規則ヲ制定シ、檢、拂、山ノ三種ノ極印ヲ定ム。

八月、廳令ヲ以テ、森林原野産物賣拂規則ヲ改正ス。賣拂ハ公賣特賣ノ二種ニ分チ、公賣ヲ原則トシ、入札方法ヲ定メ特賣ニ於テハ百圓ヲ超ユル場合一割ノ保證金ヲ徵收ス。

同月、漁業令第三條ニ依ル者ノ山林伐採方ヲ定ム。又訓令ヲ以テ林産物特賣ノ範圍ヲ定メ、十一項ヲ示シ價格四百圓ヲ超エサルモノトス。

同　四十一年

全島森林ノ概況調査ヲ完了ス。十二月、森林産物賣拂規程ヲ定ム。

同　四十二年

十一月、茨城縣人山崎某落葉松電柱輸出ヲ出願許可セラル、見本輸出ハ、尺〆ニ付單價ノ五割ヲ減額スルコトトナリ。電柱ニ付テハ東京郵便局ノ依賴ニヨリ、見本トシテ大泊川上流ヨリ遠藤米七ヲシテ千本ヲ伐採輸送セシメタリ。

十二月、臨時工業調査所ヲ設ケ、松脂採集試驗ニ着手ス。

一月、廳令ヲ以テ營利ノ目的ヲ以テスル松脂採集ヲ禁ス。

同　四十三年

同月、遠藤米七ハ韓國行枕木三萬挺ヲ新宮商行ノ手ヲ經テ請負ヒ、鐵道沿線ニ於テ伐採ス。佐藤壯吉モ亦江ノ浦附近ニ於テ枕木ヲ伐採シ一ノ澤ニ於テ三井物産會社行棧小丸太一萬本ヲ伐採ス。

山崎友次郎ハ昨年來引續キ女麗、大泊、清川、長濱ニ於テ數萬本ノ電柱伐採ヲ開始シ、本島冬期ニ於ケル住民ニ生業ヲ與フ。

各部落競テ該事業ノ開始ヲ冀ヘリ。同組ハ電柱ニ次テ、落葉松丸太ヲ伐採東京ニ移出販賣セリ。

十一月六日、賣拂内規ヲ定メ區域ヲ承認シテ年々計畫材積ヲ拂下ルコトトシ、同時ニ單價ヲ減額シ一尺〆八錢トセラル、當時、本島森林ノ聲價漸ク世人ノ注目スル所トナリ、木材業者ハ競テ大日賣拂ヲ出願シ來リ、内規ヲ制定スルト同時ニ、三井物産會社、小樽木材會社、野尻岩次郎、逢坂米七等相亞テ大日賣拂ノ許可ヲ得タリ。

大日賣拂ハ、現行年期賣拂ノ端緒ヲナスモノニシテ、當時本島森林伐採ノ程度、更新方法ニ付テ尚研究ヲ要スル點アリ、而モ安全ヲ期スル爲メ將來存置スヘキ森林ニ在テハ、天然造林上必要アル場合ハ、落葉松林ハ胸高直徑八寸以上ノモノ毎二〇本(六寸以上ノトキハ三〇本)、蝦夷松椴松林ニ在テハ五〇本ヲ毋樹トシテ塊狀ニ保存セシメ、若シ胸高直徑三寸以下ノ生育旺盛ナル

稚樹ヲ有シ、更新上必要ナシト認ムル場合ハ母樹保存ヲ要セサルモノトシ、且從來ノ毎木調査及造材檢査ノ手續ヲ省略シ、區域調査ニヨリ引渡ヲナシ、伐根調査ハ必要ニヨリ之ヲ行フコトトセリ。

明治　四十四年　五月開墾地火入規則ヲ改正シ五六月ハ絶對ニ火入ヲ禁ス、八月、大川平三郎ハ泊居以北ニ於テ大口賣拂ヲ承認サル、十二月勅令第二九七號ヲ以テ樺太國有森林原野産物特別處分令公布セラレ、十五號ニ且ツ隨意契約ニ依リ産物處分ヲナシ得ヘキモノヲ定ム。殊ニ其第三號ニ於テ重要製産品製造業者ニ對シ、其ノ事業ニ必要ナル原料ヲ賣拂フ場合ヲ掲ケタリ。

同　四十五年　二月、廳令第三號ヲ以テ森林原野賣拂規則及同第四號ヲ以テ重要製産品製造業者ノ件ヲ發布セラル。而シテ林産物賣拂標準單價ハ、樺太廳長官年々之ヲ定メ公布スルコトトナレリ。同月、訓令ヲ以テ森林産物賣拂手續ヲ制定ス。

十月、廳令第九號ヲ以テ四十四年勅令産物特別處分令第二條第三號ニ依ル處分（地方住民ナシテ雜草南草類ヲ採取セシムルトキ）ヲ出張所長ヲシテ取扱ハシム。

大　正二年　三月、廳令ヲ以テ木材流送取締規則ヲ制定ス。四月、林野火入禁止ノ件ヲ改正シ、又開墾地火入取締規則ヲ制定ス。各支廳ニ地方住民用備林ノ設定調査ヲ開始ス。三井物産會社ハ大泊ニ、樺太工業會社ハ泊居ニ各ばるぷ工場建設ニ着手ス。六月、訓令ヲ以テ樺太國有森林原野産物賣拂規程發布。九月、告示ヲ以テ大泊川上流、紀念澤上流、山下川南樺川ノ各流域森林ヲ保安林ニ編入ス。直接關係者以外ノ出願ニ對シテハ之ヲ拒否シ又從來三寸以下ノ材木ヲ存置スル内規ヲ四寸未滿ト變更セリ。

六月、訓令第六號ヲ以テ樺太國有森林原野賣拂規程ヲ發布シ四年一月及五年五月其ノ一部ヲ改正ス。本規程ニヨリ材積ノ測定ハ毎木調査又ハ標準地法ニヨルモノトシ材積單位ハ用材ハ石（十立方尺）薪炭材ハ駄（巾六尺高五尺長二尺五寸ノ層積）粗朶、枝條ハ（三尺繩ノ）ヲ用キ石ヲ駄ニ換算スル場合ハ五石ヲ以テ一駄トシ又針葉樹ノ形數ヲ定メ濶葉樹ノ形數ハ〇・六ヲ用フルコトトナレリ。

大　正三年　十一月、告示ヲ以テ立木及木材ノ材積單位ヲ改正シ、容積ハ石（十立方尺）層積ハ駄（七十五立方尺）ヲ用ヒ、四年四月一日ヨリ施行ス。

同　四　年　五月、勅令八十六號ヲ以テ樺太廳長官ハ、鐵道軌道其他公共ノ利益トナルヘキ事業ニシテ拓殖上必要ナルモノハ起業者ニ對シ其事業ニ要スル土地及森林原野ノ産物ヲ無償ニテ貸付シ又ハ讓與スルコトヲ得ルコトトナレリ。

九月、樺太工業株式會社ハ、西海岸來知志、安別間ノ年期賣拂承認ヲ得タリ。

同　五　年　三月、告示ヲ以テ五年度賣拂標準單價ヲ定ム。從來ノ標準ニ比シ、普通倍額製紙原料四倍ノ價格トナル。

五月、勅令ヲ以テ樺太漁業令中、第三條ニヨル無料山林伐採ノ件廢止サル。

本年中、各製紙會社ハ、相亞テ年期契約ヲ締結、拂下區域ヲ承認サレタリ。即王子製紙會社ハ小沼、大谷間、落穂川、留多加川各流域及小田寒眞縫間ヲ、日本化學紙料會社ハ元泊郡及敷香郡内ヲ、樺太工業會社ハ富内岸、吐鯉保間ヲ、株式會社大倉組ハ（醋酸石灰及木炭製造）西海岸太斗郡東海岸散江郡管内ヲ、鵜澤宇八外二名ハ敷香郡内等ヲ區域トス。

十二月、勅令ヲ以テ樺太廳ニ森林主事ヲ置キ、定員十六名トス。同月訓令ヲ以テ森林主事服務心得ヲ制定ス。

大　正六年　一月、王子製紙會社豐原工場建設成リ、操業開始。四月、日化紙料會社落合工場建設成リ、操業開始。九月、勅令ヲ以テ森林主事定員八名增加。同月、豐原乾餾工場ヲ株式會社大倉組ヘ拂下、民間經營トス。同月、東京麻絲紡績會社ニ對シ大泊豐原敷香各支廳管内ニ於ケル蕁麻年期賣拂契約締結セラル。

同　七　年　二月、東京麻毛紡績會社ニ對シ、久春内支廳管内ニ於テ蕁麻年期賣拂契約締結。同月、技師安藤一次林務課長任命。三月中、牟田林務課長依願免本官。六月勅令ヲ以テ拓殖、森林及土木營繕ノ事務ニ從事スル臨時職員設置ノ件ヲ公布セラレ、内森林ニ關スル職員ハ技師專任一人技手專任十九人ト定メラル。島内四ばるぷ工場（大泊、豐原、泊居、落合）ニテ生産セルばるぷ五萬三千噸。本年度引渡見込ニテ調査セル、賣拂木面積九、三九二町歩、材積三百四十五萬石。國有林經營調査ヲ行フモノ草野榮濱内濕流域泊居名寄川流域三ケ所面積三二、九六九町材積一、〇六二萬石トス。

同　八　年　年期拂木ノ調査ハ、從來標準地法ニヨリタルモ、本年ヨリ全部毎木調査ニヨルコトトナレリ。七月、廳令ヲ以テ森林主事試驗規程ヲ定メ、十一月主事教習規則ヲ制定セラル。十月、廳令ヲ以テ火ヲ失シ森林原野ヲ燒毀シタルモノハ七十圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處スルコトトナル。十一月、樺太工業會社眞岡ばるぷ工場竣成シ操業開始ス。

同　九　年　中村眞次郎ハ、幌内川流域ニ於テ樺太、化工株式會社ハ名好川流域ニ於テ、各鱗寸軸木製造ノ目的ヲ以テ白楊ノ年期拂下ヲ許可サル。

本年度ヨリ官行研伐事業ヲ開始シ、大澤、清川、川上及内音ノ四ケ所ニテ立木十三萬石ヲ伐採シテ搬出セラル。

同　一〇年　東亞産業株式會社ハ木管製造ノ目的ヲ以テ、江戸内伴皿間ニ於テ自樺一二〇萬石ノ年期拂下ヲ許可サル。

十月、廳令四十一號木材ノ移出又ハ輸出ニ關スル件ヲ公布シ、島内ニテ生産シタル丸太、角材又ハ板類ヲ島外ニ移出又ハ輸出セントスル者ハ長官ノ許可ヲ要シ初ヨリ島外ニ輸移出ノ目的ヲ以テ賣拂又ハ讓與ヲ受ケタル場合ハ屆出ヲナスコトトナレリ。

昨年夏、中里國有林ニ發生シタル松毛蟲ハ、本年ニ至リ灣内一帶鐵道沿線、西海岸富内岸野田寒間地方ニ蔓延シ被害面積五萬町歩材積二千萬石ニ達セリ。之等被害木ハ急速處分スルノ要アルニヨリ、本年ニ於テ昨年官行研伐施行箇所以外泊尾、羽母舞、床丹、藻白、久春内、珍内ノ六ケ所ニ官行研伐ヲ行ヒ、丸太三十四萬三千石、薪材一、八〇〇駄枕木二萬挺ヲ生産スル豫定トナレ

リ。

第二節　國有林

明治三十八年、本島ノ邦領ニ歸スヤ、全土ニ亘リテ、森林概況調査ノ計畫ヲ立テ、島内ヲ十區ニ劃シ、同三十九年ヨリ四十一年ノ間ニ於テ、全部ノ調査ヲ了シ、更ニ經濟上優位ノ地ニアル森林約六十五萬町歩ヲ選定シ、四十二年ヨリ向フ十箇年ヲ以テ事業區調査ニ着手セントシタルモ、四十三年度中、乾餾工業ノ企畫ヲ要急トシタルカ爲、其ノ原料タル濶葉樹ノ調査ヲ施行スルコトトナリ、事業區調査ナルモノハ遂ニ中絶セリ。大正二年、全島ノ森林三百三十五萬町歩ヲ三十箇ノ經營區域ニ分チ、此ノ内開拓豫定地三十一萬町歩ヲ控除シタル三百五萬町歩ニ付テ、十五箇年間ノ繼續事業トシテ事業區及保安林調査ヲ完了セムトスルノ計畫ヲ立テ、大正五年度ニ至リテ、樺太國有林經營調査規程ヲ制定シ、三組ノ調査班ヲ設ケ漸ク調査ヲ開始セリ。而シテ其ノ業務ハ林別區分、森林區劃、林況調査、更新方法、斫伐豫定、説明書調製ノ六項トシ、左ノ林別林種ニ區分スルモノトセリ。

第一、經濟林（第一種林、第二種林）
第二、保安林
第三、將來拓殖用地トナルヘキ見込ノ森林
第四、除地

而シテ以上ノ區分ヲ爲スハ、左ノ標準ニ依ルコトトセリ。

一、經濟林タル第一種林ハ森ヲ方正ナル、狀態ニ導キ其ノ施業ヲ永遠ニ保續シ得ヘキ區域。
二、經濟林タル第二種林ハ地方居住者ノ用材、薪炭材又ハ鑛業用ノ材料ヲ供給スヘキ區域。
三、保安林ハ別ニ定ムル所ニヨリ保安上必要ナル區域。
四、將來拓殖用地トナルヘキ見込ノ森林ハ傾斜二十度以下ノ土地ニシテ農業ニ適スル區域。
五、除地ハ將來施行ノ見込ナキ區域。

大正六年度ニ於テハ、調査組數ヲ十五トシテ、可及的速ニ完成スルノ方針ヲ採リタルモ、偶々、議會解散セラレ豫算不成立ノ結果、前年度通リ三組ヲ以テ實行スルノ已ムヲ得サルニ至リシカ、同七年度ヨリ十五組トスルノ外、繼續期間ヲ十箇年ニ短縮シ、調査、更新、管理、保護ニ亘リ、一切ノ計畫ヲ爲スコトトシ、樺太國有林野經營綱領トシテ成案セリ。本案ノ調査豫定ハ、調査班十五組（一組ハ主査一名、副査一名）ヲ設ケ各組ノ一箇年功程ヲ二萬町歩トシ、大正七年ヨリ同十六年ニ至ル十箇年間ニ完了スルノ方針トス。而シテ調査區分ヲ要スヘキ現在國有林野面積ハ、三百三十五萬町歩ナルモ、内九萬町歩ハ、帝國大學演習林、五千町歩ハ、試驗林豫定區域トシテ別ニ之ヲ調査シ、又凍苔地（ツンドラ）約二十五萬町歩ハ調査不急ト認メテ之ヲ除外シ、其ノ餘ノ三百萬五千町歩ニ付テ調査ヲ行ハントスルモノニ係リ、九年度迄ニ調査ヲ終了セル面積六十萬町歩材積一億九千餘萬石ニ及ヘリ。

本島森林ハ、全部國有林トシテ管理セラレ、未タ民有林ヲ存セス、且森林法中ノ森林警察及罰則ニ關スル規定以外ハ、本島ニ施行セラレス。又保安林ニ關スル特別規定ヲ設ケサルモ、笹生地、散生地、ノ如キ利用困難ナル箇所ハ、施業制限地トシテ、當分施業ヲ行ハス。其ノ特殊關係アル區域ハ、保安林トシテ之ヲ告示シ、一般

的處分ヲ行ハサルモノ現在大泊川上流、記念澤上流、山下川流域、南樺川流域ニ存在スル各森林ハ、大正二年九月告示ヲ以テ保安林ニ編入シ、外ニ告示ヲ爲ササルモ豐原玉川水源涵養林ハ保安林トシテ之ヲ取扱居レリ。其ノ他、本島周圍ノ近海ハ、世界有數ノ漁場トシテ、其ノ主要水產物タル鮭鱒ハ、河川ニ遡上シ、產卵繁殖スルヲ以テ、之カ保護ヲ計ル爲、樺太漁業取締規定ニヨリ保護河川ヲ指定シ、各種ノ制限ヲ付セリ。是等保護河川ハ、一方林業ヨリ觀察スルトキハ、木材流送機關トシテ、必要缺ク可ラサルモノナルヲ以テ、期間ト流材方法制限ノ下ニ、流材ヲ行フノ途ヲ開ケリ。卽チ、木材流送取締規則（大正三年三月廳令三號、大正六年六月廳令一四號）ニヨリ、保護河川ニ於テハ、流材ノ方法ハ堰流シ其ノ他之ニ類スル方法ヲ禁シ、保護期間トシテ每年七月一日ヨリ十一月三十日ニ至ル間、木材ノ流送ヲ禁止セルモ、林業ニ多大ノ關係ヲ有セル特殊ノ河川ハ、保護期間內ト雖其ノ本流及湖口ニ於ケル筏流ヲ行フコトヲ得セシム。尤モ大正十年度限リ、長官ノ許可ヲ得ルトキハ、前記保護期間運材方法ニ關スル制限ニ依ラサルコトヲ得セシメ、以テ事業ノ便宜ヲ計レリ。以下森林保護及ぱゝぷ工業等二、三ノ事項ニ付テ之ヲ記述セムトヌ。

一、森林保護

森林保護上、危害ノ最大ナルモノハ、森林火災ニ若クモノナシ。殊ニ本島森林ハ、蝦夷松、椴松ノ一齊林ヨリ成リ、火ニ對スル抵抗力最弱ク、領有以前在住土人ニヨリテ燒損セラレタル面積少ナカラス。邦領トナリテモ、尙年々山火ノ跡ヲ絕タス シテ、大正二年ヨリ九年ニ至ル最近八箇年ノ火災總數ハ、五百五十回ニ上リ、一箇年平均六十三回ノ多キニ及ヒ、其ノ都度夥シキ被害ヲ生シ、現在山火跡地ノ面積十六萬町步ト稱セラレ、將來之カ造林ヲ行フニ至ラハ、其ノ勞費蓋シ多大ナルモノアラン。從テ領有以來、山火ニ對スル取締ハ、頗ル注意ヲ拂ハレ、之ニ關スル取締規定ハ、左記ノ如ク屢、改廢ヲ經、又時々諭告ヲ發セラル。其ノ他現在ニ於テハ防火線ノ設置等、營林上ヨリ豫防手段ヲ講スルノ外、地方ニ森林保護組合ヲ設ケ、町村若ハ部落共同ノ責任ヲ以テ、一定地域ノ森林ヲ保護スル等、漸次設備ノ完成ヲ期セリ。

一、明治三十九年六月、軍令ヲ以テ林野火災取締規則ヲ制定シ、林內若ハ其ノ近傍ニ於テ、焚火ヲナシ、又ハ火氣ノ携帶ヲ禁シ、且罰則ヲ設ク。

一、同四十四年五月、開墾火入規則ヲ改正シ、五六兩月ハ絕對ニ火入ヲ禁止ス。

一、同四十五年三月、廳令第七號ヲ以テ國有森林原野取締ニ關スル件ヲ公布シ、火氣携帶、喫烟、焚火等ニ關スル取締條項ヲ設ク。

一、大正二年四月、廳令第十號ヲ以テ林野火入禁止ノ件ヲ改正シ、同時ニ開墾地火入取締規則ヲ制定ス。

一、同六年五月、廳令第十三號ヲ以テ樺太國有林野取締規則ヲ發布シ、同時ニ前項ノ廳令ヲ廢止シ、火氣使用場ノ設備ニ關シ告示スル所アリ。

一、同八年十月、廳令第三十七號ヲ以テ、火ヲ失シ森林原野ヲ燒燬シタル者、又ハ火氣使用場ノ設備ヲ爲ササル者、開墾地火入取締規則ニ違反シタル者ニ對スル罰則ヲ定ム。

一、同十一年三月、勅令第六十四號ヲ以テ、森林法第七十六條乃至第九十四條及百二條（森林警察罰則）ヲ樺太ニ施行ス。

二、ぱゝぷ工業

明治四十一年中、島內森林概況調査ノ成ルヤ、ぱゝぷ工業ノ最有利ナルヲ認メ、當業者ニ勸誘ノ結果、四十

三年三井物産會社ハ率先社員ヲ派シテ調査シ、島内西海岸鐵道沿線及灣内方面ニ於テ立木一千餘萬石ヲ二十箇年ニ亙リテ拂下ノ契約（本權利義務ハ現在王子製紙會社ニ歸屬シ樺太分社ト稱ス）ヲナセリ。當時樺太廳ノ拓殖方針ハ、是等ノ企業ヲ奬勵スルカ爲林木拂下ニ於テモ數量ノ多キニ從ヒ、單價ノ割引ヲ行ヒ、殊ニ工業原料ニ係ルモノハ、五割引トスルノ特典ヲ與ヘタリ。本事業ノ開始ハ、三井物産ヲ嚆矢トシ、尋テ王子製紙、樺太工業、日化紙料、富士製紙ノ四會社ノ經營ニヨリ、國有林ノ大部分ハ、之カ年期賣拂區域トナレル狀況ニシテ、殊ニ歐洲大戰ノ勃發スルニ及ヒ、急激ノ進歩ヲ來スニ至リ、現在四會社ノ工場數六個ナルモ、更ニ增設豫定ノ四工場ヲ加フルトキハ、將來島内ノぱるぷ工場十箇所ヲ數ヘ、其ノ生産年額十四萬噸ニ達スヘキ盛況ナリトス

三、造　林

本島ノ森林ハ、其ノ成立全ク天然更新ニヨリ行ハレタルモノニシテ、將來モ亦コノ自然的作用ヲ助長シ、主トシテ天然造林ニヨルヘキコト勿論ナリト雖、火災跡地、無立木地又ハ天然作用ノミニテ成林不可能ナル個所ノ如キハ、人工造林ヲ行フノ要アリ。由來、本島ニ於ケル火災跡地ハ、十數萬町歩ノ大面積ニ達スルヲ以テ、伐採ノ進行ニ伴ヒ、之等無立木地ノ造林ヲ行ヒ、生産保續ノ途ヲ講セサルヘカラス。依テ、大正十年ニ至リ、造林計畫案ヲ立テ、管内ニ九箇所ノ廳設苗圃ヲ設置セリ。然レトモ、其ノ規模小ニシテ何レモ三四百坪ニ過キサルヲ以テ、今後更ニ其ノ擴張ヲ要スル狀態ニアリ。

第三章　臺　灣

第一節　領有以來ノ林政沿革

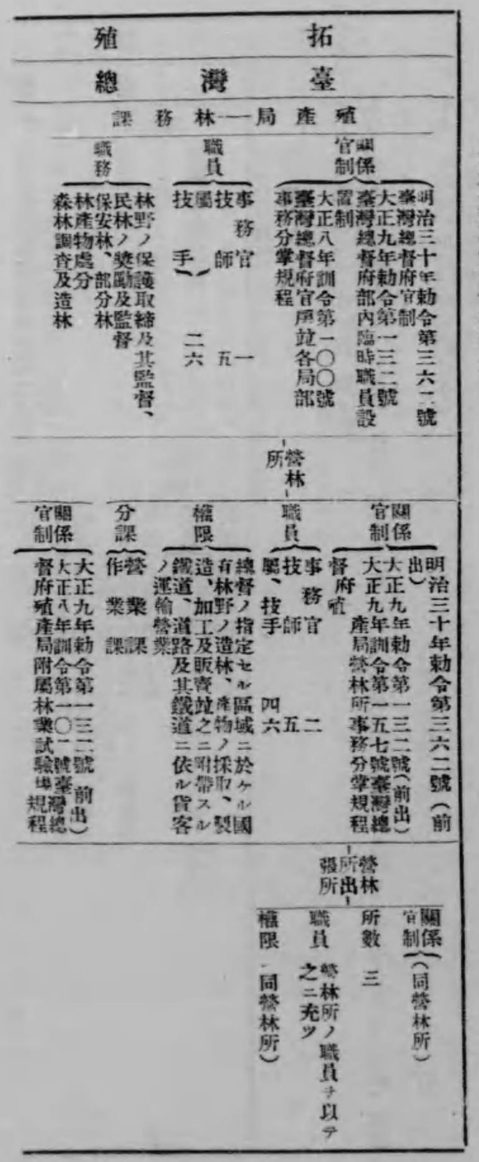
臺灣ノ我カ版圖ニ歸シタルハ、明治二十八年五月ニシテ、當時總督府假條例ナルモノ制定セラレ、軍政ノ下ニ民政、陸軍、海軍ノ三局ヲ置キ、民政局内ニ殖産部ヲ設ケ、同部林務課ニ於テ森林ニ關スル行政ヲ主掌セルモ、諸事草創ニ際シ、未タ何等ノ施設ヲ見ルニ及ハス。同年十月府令第二十六號官有林野取締規則ヲ發布シ、森林ノ業主權ヲ確認スルト共ニ、林木ノ伐採及開墾ヲ取締レリ。蓋シ領臺以前ニ在リテハ、清國ノ取締リナルモノ殆ント之ナク、唯開墾ニ對シテ「墾照」若ハ「丈單」ナルモノヲ付與シテ之ヲ認容シ來レルニ過キサリシカ爲、深山幽谷ノ伐木、開墾、放牧等熾ンニ行ハレ、荒廢ノ極ニ達セシヲ以テ當面ノ急ニ應スル必要ニ出テタルモノナリトス。同年十二月苗圃ヲ臺北ニ創設シ、翌二十九年三月、軍政ヲ徹シテ民政ヲ布キ、民政局内ニ殖産部ヲ置キ、森林ニ關スル事務ハ、同部ニ屬スル林務課ニ於テ之ヲ取扱フコト猶舊ノ如ク、之ト同時ニ撫墾署官制發布セラル。元來撫墾署ナルモノハ蕃地蕃人ノ取締、撫化及授産ニアリタルコト勿論ナリト雖、臺灣ノ林業開發ト樟腦製造ヲ盛ナラシムルカ爲、先以テ其ノ撫化ヲ緊要トシタルモノニシテ、其ノ事務ハ拓殖系統ニ屬スルモ、森林ト密接ノ關係ヲ爲シ、恰カモ内地ニ於ケル林區署ノ如キ觀ヲ有シタリキ。該事務ハ三十一年六月地方事務ノ擴張ト共ニ、殖務署ニ移リ、後三十四年十一月地方官々制ノ改正ニヨリ消滅セリ。是ヨリ先二十九年九月勅令第三百十一號官有森林原野及産物特別處分例ヲ發布セラレ、林野ノ貸下豫約賣拂及林産物賣拂ノ制ヲ定メ、其ノ十一月ニハ森林調査内規ヲ制定シ、之ニ依リテ本島森林ノ概況ヲ調査シ、林業上ノ基礎ヲ立ツルコトトナレリ、之レ恰カモ内地ニ於ケル國有林野實況調査内規ト其ノ揆ヲ一ニシタルカ如キモノナリキ。三十一年六月、總督府官制改正ニ依リ、殖産部廢止セラレテ殖産課トナリ、從來分立シタル拓殖、林務等ノ各課ハ其ノ一係トナリタルモ、林務係ニ於テハ尙撫蕃製腦事務ヲ管掌シタルカ故、他

ノ係ヨリハ幾分府内ニ重キヲナセリ。三十四年十一月、又官制ノ改正アリテ、民政部ニ殖産局ヲ置キ、其ノ下ニ農務、拓殖、權度ノ三課ヲ分立セラレタルモ、林務課ハ遂ニ復興スルニ至ラス。加フルニ、同年五月、專賣局官制ノ發布ニ從ヒ、製腦事務ハ同局ニ移リシカ爲、林務係ノ主掌益々縮小ノ已ムヲ得サルニ至リ、臺灣林政ノ機關ハ一時不振ノ狀態トナレリ。

三十四年九月律令第十號臺灣保安林規則ヲ發布シ、森林ノ保護、國土ノ保安ヲ維持セムコトヲ期シ、三十六年六月法律第五號粗製樟腦樟腦油專賣法ヲ發布シテ、從來頗ル放縱ナリシ製腦事業ヲ整理スルト同時ニ、林木ノ亂伐亂消ヲ防制シ、三十八年九月府令第七十二號蕃地取締規則ヲ發布シテ伐木其ノ他ノ事業ノ爲ニ蕃地内ニ出入若ハ居住スル者ヲ許否シ、四十三年十月律令第七號林野調査規則ヲ發布シテ土地臺帳ニ登錄セラレタル林野ニ對スル業主權確認ノ方法ヲ規定シ、大正八年十一月律令第十號臺灣森林令ヲ發布シテ官有林野取締規則及臺灣保安林規則ヲ廢止シ、專ラ林野ノ保護取締ヲ厲行シ、以テ國土ノ保安ト公衆ノ福祉トヲ增進セムコトヲ期セリ。

以上ノ外、三十六年中、阿里山調査ノ議ヲ決シ、一面亦鹿島組ニ依ル巒大山、土倉氏ニ依ルかつどん山伐木事業ノ起ルアリテ、本島ノ林業ハ漸次發展ノ機運ニ向ヒ、三十八年四月官制改正ニ際シ、曩ニ廢セラレタル林務課ハ殖產局内ニ復活設置セラレ、官民有地ノ造林及藤田組ニヨリテ着手シタル伐木事業ヲ監視督勵シ來リシカ、四十一年藤田組ノ阿里山經營ヲ中止スルヤ、之カ官營ヲ企圖シ、遂ニ四十三年四月國有林作業機關トシテ、阿里山作業所ヲ設置シ、森林ニ關スル業務ハ一時ニ振起スルノ動機ヲ爲スニ至レリ。大正四年七月勅令第百三十一號營林局官制ノ發布トナリ、阿里山作業所ヲ廢シテ、從來ノ阿里山ノ斫伐ニ加ヘ八仙山及宜蘭濁水溪ノ伐採ヲ開始シ、併セテ本島特有樹種ノ造林ヲ行フコトトナリ、更ニ進ムテ大正八年六月勅令第三百十四號ヲ以テ、營林局官制ヲ改正シ、次テ同月勅令第三百十五號ヲ以テ營林局臨時職員制ヲ發布セラレ、保安林、林野取締、林業試驗及民林ノ監督奬勵ニ關スル事務ヲモ管掌スルコトトナリ、殖產局ヨリ林務課、林業試驗場及樹苗養成所ヲ割キテ之ヲ併合セリ。然ルニ又大正九年八月勅令第三百四十八號ヲ以テ總督府官制ヲ改正シ營林局ヲ廢シテ、營林所ヲ設ケ、殖產局ニ附屬セシメラル。其ノ結果、林務課ハ殖產課ヲ併合シテ、殖產局ノ一課ニ復歸シ、林業試驗場亦同局ノ附屬トナリ、以テ今日ニ至レリ。現今ニ於ケル林務系統及沿革年表ノ概略左ノ如シ。

森林事務官廳系統表



局			
府督			
專賣局 — 造林課			
關係官制（明治三十四年勅令第一一六號臺灣總督府專賣局官制）	職員	技師 二	試驗場
職員	技師	技手 八	
事務官 一	技師 一	技手 一	
權限 樟樹ノ造林			

州廳			
職務	職員	關係官制	職務
林野ノ取締及保護	森林主事 一四二	大正九年勅令第二一八號臺灣總督府地方官官制 二	內外國產有用植物ノ調査及移植 森林保護並利用ノ試驗及 造林及森林ノ調査、種苗ノ改良並配付
	屬、技手 二三	技師 二	

沿革年表

明治二十八年　四月、馬關條約ニヨリ臺灣我　國ニ歸ス

五月、總督府假條例制定セラレ民政、陸軍、海軍ノ三局ヲ置キ、民政局內ニ殖產部ヲ設ケ、其ノ下ニ農務、林務、鑛務ノ三課ヲ置ク。

十月、官有林野取締規則發布（日令）

十二月、臺北苗圃ヲ設置ス。

同　二十九年　三月、軍令ヲ廢シテ民政ヲ布キ民政局內ノ殖產部ニ農商、拓殖、林務、鑛務ノ四課ヲ置ク。

同月、撫墾署ヲ設ケ、宜蘭廳下羅東外十箇所ニ之ヲ配置シ、其ノ事務ハ殖產部拓殖課ニ於テ之ヲ管掌ス、又地方廳ハ分テ臺北、臺中、臺南ノ三縣及ヒ彭湖廳トシ、殖產ニ關スル事項ハ縣ニ在リテハ、內務部殖產課、廳ニ在リテハ內務課ニ於テ之レヲ主掌ス。

九月、官有森林原野及產物特別處分令公布（勅令）

十月、臺灣官有森林原野貸渡規則及同產物賣渡規則制定（府令）

十一月、森林調査內規ヲ制定シ、之ニ依リ本島森林ノ概況ヲ調査シ、林業上ノ基礎ヲ立ツルコトトセリ。

同　三十年　五月、新竹、嘉義、鳳山ノ三縣及宜蘭、臺東ノ二廳ヲ增加シテ地方政務ヲ擴張シ、又下級行政機關トシテ必要ニ應シ辨務署ヲ設ケ、從來民政局ニ統轄シタル事務ノ一部ヲ地方ニ移スニ至レリ。

同　三十一年　十月、臺灣總督府官制ヲ公布シ、臺灣總督府條例及民政局官制ニ代ヘラル。

六月、總督府官制改正、民政財政ノ兩局ヲ廢シテ民政部ヲ置キ、關部ニ十四課ヲ設ケ從來ノ殖產部ハ殖產課トナレリ。

同月、地方官々制ヲ改正シテ三縣三廳トナシ、縣及廳ノ管內須要ノ地ニ辨務署ヲ置キ、撫墾署ヲ廢止ス。

七月、臺灣地籍規則及臺灣土地調査規則公布（律令）

九月、臨時臺灣土地調査局設置

同　三十二年　隘勇線制度ヲ設ケ樟腦製造ノ保護ヲ爲ス。

八月、樟腦專賣法公布、殖產課內ニ樟腦局ヲ設置シ、臺北外五箇所ニモマタ樟腦局ヲ設ケ、其ノ他各地ニ多數ノ支局ヲ置カル。

同　三十四年　五月、專賣局官制公布、樟腦事業ハ鹽、阿片、煙草ト共ニ同局ニ於テ統轄スルコトトナレリ。

九月、保安林規則制定（律令）

十一月、總督府官制改正、民政部ニ警察本署及總務、財務、通信、殖產、土木ノ五局ヲ置キ、農商、拓殖、權度ノ三課ハ爲ヒ殖產局內ニ分立スルコトトナレリ。又地方制度ニ在リテハ、從來ノ縣及廳ヲ廢シ更ニ二十廳ヲ置カル。乃チ現今ニ於ケル地方官々制ノ基礎ヲ爲スモノナリトス。

同　三十五年　二月、臺灣官有財產管理規則公布（勅令）

三月、官有森林原野產物賣渡及官有森林原野貸渡極印規則制定（府令）

四月、恒春熱帶植物殖育場設置

五月、從來跋扈跳梁シタル匪賊、勘定ノ功ヲ奏ス

同　三十六年　六月、粗製樟腦、樟腦油專賣法（法律）、同施行細則（府令）公布

同　三十八年　四月、總督府官制改正、殖產局ヲ四課ニ分チ、林務課ヲ再興シテ其ノ事務ヲ拓殖課ヨリ分離ス。

六月、官有林野產物賣下價格標準制定（民殖通達）

九月、蕃地取締規則制定（府令）

同　三十九年　藤田組ニ於テ阿里山ヲ經營ス

同　四十年　二月、臺灣樟樹造林奬勵規則（律令）及同規則施行規則（府令）公布

三月、臺灣保安林規則、施行規則制定（府令）

明治四十一年　四月、阿緱廳下ニ熱帶纖維植物苗圃設置
同　四十三年　四月、阿里山作業所ヲ設ケ官營トス。
十月、臺灣林野調査規則(律令)及同施行規則(府令)公布
同月、高等林野調査委員會規則(律令)、同施行規則(府令)公布
同月、地方林野調査委員會規則(府令)制定
同　四十四年　五月、林業試驗場ヲ設ケ、其ノ本場ヲ臺北(元臺北苗圃)ニ、支場ヲ恒春(元恒春熱帶植物殖育場)及嘉義(元嘉義護謨苗圃)ニ置カル。
九月、臺灣官有森林原野豫約賣渡規則(府令)制定
大正　元年　三月、新竹廳苗栗一堡三叉河庄ニ樹苗養成所設置(元熱帶纖維植物苗圃及三叉河樟苗養成所)
四月、臺灣官有森林原野貸渡規則改正(府令)
五月、臺灣造林用種苗下付及賣拂規則(府令)制定
同月、官有森林原野產物賣渡及官有森林原野貸渡極印規則改正(府令)
同　二年　六月、臺灣官有森林原野及產物特別處分令改正(勅令)
七月、砂防造林八卦山作業所ヲ臺中廳武西堡內灣庄ニ設置ス。
同　四年　七月、營林局ヲ設置シ阿里山作業所ヲ廢止ス。
九月、八卦山作業所ヲ營林局ノ主管ニ移ス。
同　八年　十一月、臺灣森林令(律令)同施行規則(府令)公布
同　九年　營林局廢止セラル。

第二節　一般森林

領臺以前ニ於ケル清國政府ノ森林治績ハ、何等ノ見ルヘキモノナク、多數移民ノ亂伐、濫墾ニ委シタルト獰猛ナル化外民ノ蟠踞セル蕃界ニ於テハ、幼稚ナル耕作法ニヨル切替畑ノ惡習トニ依リテ、本島ノ森林ハ甚シク殘害セラレ、其ノ慘狀見ルニ忍ヒサルモノアルニ至レリ。然ルニ、急峻ナル山地ニ於テハ、猶原生林ノ狀態ヲ以テ保存セラルルモノノ少ナカラサルハ、偶々蕃人智識ノ進歩セサルト、支那人ノ容易ニ足ヲ容ルヲ得サリシカ爲、自然ニ放任セラレタル結果ニ外ナラス。而シテ、前記ノ荒廢地ハ、國土保安上忽諸ニ付スヘカラサル狀態ナリシニヨリ、領有以來、當局者ハ此ノ點ニ鑑ミ、又民度漸習ニ應シテ、方策ヲ立テ、第一著ニ地籍ノ確定及其ノ取締ヲ爲スカタメ、官有林野取締規則ヲ設ケ、次テ臺灣保安林規則、臺灣林野調査規則ヲ公布シ、最近臺灣森林令ヲ發布シ、茲ニ林政ノ基礎ヲ確立セリ。

本島ノ總面積ハ、二千三百三十二方里ニシテ、九洲ト伯仲ノ間ニ在リ。其ノ內林野面積(不毛地、河川區域等ヲ包含ス)八十%ヲ占メ二、九二七、一〇九甲(一甲ハ九段七畝廿四歩ニ當ル)ヲ有セリ。之ヲ行政區域內及蕃地內ニ分テハ

行政區域內	一、一八一、六二〇甲	山林　七六二、七二二甲 原野　一七九、二四六 除地　二三九、六五二
蕃地區域內	一、七四五、四八九甲	

トナル。而シテ本島林野ノ官民有區分ハ、久シク不確實ノ狀態ヲ以テ推移シ、領臺後臨時臺灣土地調査ノ擧アリシト雖、其ノ範圍タル田畑、建物、數地、養魚池等ニ限ラレ、林野ニ及ハサリシヲ以テ、明治四十三年度ヨリ五箇年繼續事業トシテ、官民有ノ區分ヲ正シ、大正四年度ヨリ漸次官有林野ニ於ケル要存置不要存置區別ノ調査ヲ重ネ、之カ整理ノ方法ヲ採ルニ至レリ。官民有ノ區分面積左ノ如シ。

官有	九四二、五五七甲
民有	三一、一七九
計	九七三、七三六

前記、官有地ノ内、從來產物ノ採取ヲ爲セルカ如キ緣故關係アルモノハ、保管林設定ノ許可ヲナシ、其ノ他豫約拂下、貸下又ハ樟樹造林奬勵、糖業奬勵等產業ノ發展ニ資スルノ處理方法ヲ採レリ。以下、重要ナル施設ノ二三ニ付テ、其ノ概略ヲ述ヘン。

一、保安林

本島ノ林野ハ、既記ノ如ク頗ル荒廢ニ傾ケルノミナラス、其ノ地勢、地質、氣候ノ關係上、治山、治水及水源涵養等ニ關スル施設ヲ要スルモノ多ク、國土保安上一日モ看過スヘカラサルモノアルヲ以テ、明治三十九年ヨリ全島ニ亘リテ保安林編入調査ヲ開始セリ。其ノ種類及官民有區別(大正八年度末)左ノ如シ。

種類	官有地面積	民有地面積
飛砂防止	一〇、三三一甲	五二一甲
土砂扞止	三二、一六二	九九
水源涵養	五二、〇五九	二一七
風致	二、七三三	七八
魚附	四、四二一	—

種類	官有地面積	民有地面積
防風	一、三一八甲	九甲
潮害防備	八九	—
墜石防止	一三一	—
水害防備	三二八	二〇

二、造林

從來本島ニ於テハ、一般住民ノ造林思想殆ント皆無ニシテ、益〻林地ノ荒廢ヲ惹起スルニ至リタル實狀ニ鑑ミ、總督府ハ夙ニ苗圃ヲ設置シ、焦眉ノ急ニ迫レルモノノ造林ニ著手シ、一面植樹用林野ノ貸付、樹苗ノ下付及造林ノ指導奬勵等ニヨリ、民營造林ノ發展ヲ促セリ。就中、樟腦原料タルヘキ樟樹ノ造林ハ、本島ノ產業上最必要ナルモノナルヲ以テ、明治三十三年度ヨリ繼續事業トシテ官行シタルヲ、大正元年度ヨリハ專ラ專賣局ノ所管トナシテ實行シ、同時ニ民營造林ニ對シテモ殖產局ヨリ樹苗ヲ下付シ、又引續キ土地ノ貸下ヲナシテ奬勵ヲ加ヘ居レリ。其ノ大正九年度迄ノ成績左ノ如シ。

樟樹造林面積	四五、三五六甲	官行 二七、六五八甲 民營 一七、六九八
樟樹以外ノ造林面積	四三、七五〇甲	官行 一一、四四五 民營 三二、三一三

以上ノ外、斫伐跡地ノ造林及保安林ノ造林ヲ主目的トセル各廳委託造林ノ存スルモ、茲ニ之ヲ贅セス。

三、林業試驗

林業試驗場ハ、殖產局附屬トシテ、明治四十四年創立セラレ、本島森林植物ノ利用、保護及內外國產有用植物ノ調査及移植埔苗ノ改良等ニ關スル諸般ノ試驗ヲ行フヲ目的トス。其ノ本支場左ノ如シ、

イ、臺北本場　本場ニ於テハ殖產試驗及利用試驗ヲ主目的トシテ實行ス。

ロ、恒春支場　熱帶植物ノ栽培試驗ヲ主目的トシテ龜仔角ニ其ノ本場ヲ、漢口、勝勝束、高士佛ニ分場ヲ設ケ作業ヲ實行ス。

ハ、嘉義支場　各種護謨ノ外ニ主要林木ノ栽培試驗ヲ行ヒ、其ノ成績ヲ調査シ、殘餘ノ苗木ハ一般ノ拂下及配付ニ供シ、本場ヲ山仔頭ニ、分場ヲ埤子頭ニ、試驗地ヲ泛水溪ニ設置セリ。

第三節　樟腦及樟樹造林

其一　樟腦

樟腦ハ日本、支那殊ニ臺灣ノ特產ニシテ、往時藥用又ハ防蟲用トシテ世ニ知ラレ其ノ間需要盛大ナラサリシカ、一八六九年「セルロイド」ノ發明以來、工業用トシテ使用セラルヽニ至リ頓ニ需要ヲ增加シ其ノ面目ヲ一新セリ。

臺灣ニ於テハ、鄭氏ノ時既ニ樟樹ヨリ、樟腦ヲ製スルノ法ヲ傳ヘシト云フト雖明ナラス。漸ク發達セルハ、實ニ咸豐年間ニ在リ。卽同五年西曆(一八五五年)英國「ジヤーデン、マヅイソン」商會ハ在臺官吏ト私ニ特約シテ樟腦ヲ輸出シ巨利ヲ博セシコトアリ。同十年臺灣四港ヲ開クニ及ヒ樟腦ハ實ニ臺灣輸出品ノ主ナルモノノ一ナリシカ、臺灣道臺陳方伯ノ議ニ依リ之ヲ官辦トシ專ラ料館ニ於テ之ヲ買收セリ。同治五年(西曆一八六六年)臺灣道臺吳大廷ハ、料館ノ樟腦ヲ外人ニ售ラサルノ議ヲ立テシカ、英國領事主トシテ異議ヲ唱ヘ遂ニ英國公使「アルコック」ニ照會シテ淸國總理衙門ニ迫リ、同八年樟腦取締ニ關シ章程ヲ定メ、從來ノ官有樟腦料館卽チ專賣法ヲ廢シ、外國商人ハ稅關長ノ發給スル內地通過券ヲ得テ臺灣內地ニ入リ、樟腦ヲ買收シ之ヲ開港場ニ運搬シ稅關ニ報告シテ稅金ヲ約付シタル上之ヲ輸出シ得ルニ至リ、樟腦專賣ノ制全廢セラレタリ。後劉銘傳ノ時專賣ノ制ヲ復活シ、腦務總局ノ下ニ腦務局及分局ヲ置キ、之ヲ悉ク官ニ買收ノ上特許商人ニ售出セシカ、光緖十六年英國商人トノ間ニ紛爭ヲ生シ、各國領事ヨリモ亦專賣ノ制ヲ撤廢スヘキ抗議出テ同年十一月樟腦官辦ヲ廢シテ民業ニ復歸セリ。領臺後明治二十八年樟腦製造取締規則ヲ定メ、舊政府ノ許可證ヲ有スル者ノ外ハ其ノ製造ヲ禁シ、翌年三月樟腦規則ヲ發布シテ一定ノ課稅ヲ爲スニ至レリ。爾後樟腦ニ關シテ常ニ外國ト交涉事件ヲ生シ、製腦者亦課稅ニ困ミテ粗製濫賣窮極スル所ヲ知ラス。仍テ三十二年八月遂ニ本島ニ樟腦專賣制ヲ施行セリ。現在世界ニ於ケル樟腦ノ需要ハ、約千二百萬斤ニシテ、其ノ大半ハ本島ヨリ之ヲ供給ス。其ノ需要ハ、上記「セルロイド」工業原料ニ供セラルヽモノ丈部分ヲ占メ、他ニ驅蟲用、防臭用、醫藥用ノ外、印度ニ於テハ燒薰用ニ供セラルヽモ、近來「セルロイド」ノ需要範圍年々擴大シ、又種々新規ノ用途發見セラルヽニ因リ、益〻之カ需要ヲ促進シ來レルト共ニ、原料タル樟腦ノ需要益〻增加シ殆ト底止スル所ヲ知ラサルノ趨勢ヲ示シ居レリ。而シテ其ノ初メ、專賣制度施行ノ當時ニ在リテハ、世界ノ需要總額ハ凡ソ九百萬斤ナリシヲ以テ、本島ニ於テ四百五十萬斤ヲ供給シ、他ノ五十萬斤ハ之ヲ內地產ノ輸出ニ委スルノ見込ナリシニ、制度施行ノ結果、專賣品價格ノ騰貴ヲ見タル爲、內地產額ノ增加ヲ來シ、而モ樟腦ノ需要ハ未タ遽ニ增加セス、加フルニ制度施行前ノ停滯品ハ、尙市場ニ堆積シ、價格ノ暴落ヲ來シタルノミナラス、自由品タル內地產ト專賣品タル臺灣產トハ、海外市場ニ於テ競爭スルノ奇觀ヲ呈セリ。是ニ於テ本島ニ在リテハ、生產ヲ減縮シ需要ノ平均ヲ圖リ、次テ內地ニ於テモ臺灣ト步調ヲ一ニスルノ方針ヲ執リ、明治三十六年內地、臺灣共通ノ樟腦法案ヲ帝國議會ニ提出シテ協贊ヲ得、同年六月共通ノ專賣法ヲ施行セリ。幾許モナクシテ歐米ニ於ケル「セルロイド」工業ハ、急速ナル發達ヲ遂ケ、其原料タル樟腦ノ需要ヲ增加シタル爲、一時支那產出腦樟ノ激增ヲ來シタルモ其後屛息シ我カ專賣樟腦ハ依然トシテ世界市場ヲ獨占シ居レリ。

樟腦及樟腦油ノ製造ハ、一時總督府自ラ經營シタルコトアリシモ、現今全部民營トシ相當ノ資產ト經驗トヲ有スル者ノ出願ニ對シテ之ヲ許可シ、一定ノ官有山林ヲ限リテ製腦區域ト爲シ、區域內ノ原料樟腦、其他ノ薪材及器具用材ハ一定ノ價格ヲ以テ拂下ケ、其ノ製造シタル樟腦及腦油ハ、亦一定ノ賠償金ヲ交付シテ之ヲ專賣局ニ收納ス。此等製腦業者ハ、從來十廳下ニ亘リ二十三名ヲ算シタリシカ、大正八年四月ニ至リ全部合同シテ臺灣製腦株式會社ヲ設立シ、事業ヲ繼承スルニ至リタルヲ以テ、政府ニ於テモ爾來製腦上ノ監督取締

等ニ對シ、統一的便宜ヲ有スルヲ得ルニ至レリ。而シテ其ノ收納シクル樟腦ハ、一部ハ之ヲ專賣局工場ニ於テ、一部ハ之ヲ同局神戸支局ニ送リテ調理シ、樟腦油ハ一部ハ專賣局工場ニ於テ、一部ハ神戸ニ於ケル民間斯業者ニ賣渡シ、以テ樟腦ヲ再製シ、其ノ再製樟腦ハ全部之ヲ專賣局ニ收納ス。又上記樟腦再製作業中、副產物トシテ生スルモノハ赤油、白油及藍色油ニシテ、其ノ用途ハ、赤油ハ主トシテ香料(サフロール)、除臭劑、驅蟲劑ニ使用セラレ多ク外國ニ輸出セラル、白油ハ防臭劑、驅蟲劑、溶解劑、石鹼配合劑トシテ多ク內地ニ於テ消費セラレ、藍色油ハ殆ト全部「デシンフエクトール」ノ原料トシテ使用セラル。專賣局ニ於テ販賣スル樟腦ハ、所謂粗製樟腦ニシテ、甲種、乙種及改良乙種ノ三種トス。

甲種樟腦ハ、扁平骸子形ニ壓搾シタル樟腦ニシテ、明治三十二年ヨリ三十九年ニ至ル間ニ四、五六三、四四〇斤ヲ製造販賣シタルモ、其ノ後需要甚少ナク、現今ハ主トシテ乙種及改良乙種ヲ販賣ス。其ノ價格ハ時ニ變動アレトモ、目下內地賣百斤ニ付乙種二百三十六圓、改良乙種二百七十圓、外國賣一本(入四斤六六八八)ニ付乙種二百二十七圓、改良乙種二百五十五圓ナリ。仕向地ハ內地及外國ニシテ、外國ハ米國及歐洲中英、佛ノ需要最多ク、現今ハ民間ニ委託シテ之カ販賣ヲ爲サシム。

樟腦中ニハ、種々アレトモ、最多キハ製腦原料トシテ含腦多キ所謂本樟木ニシテ。芳樟木之ニ次ク、芳樟木ハ腦分少キモ之ヨリ多量ノ「リナルール」分ヲ含有スル貴重ナル芳香揮發油ニシテ、該「リナルール」油ハ其ノ原產地タル墨其西哥ノ生產品ニ比シ品質聲價倶ニ相讓ラス、頗ル世界ノ注目ヲ惹ケリ。總督府ニ於テモ夙ニ有望ノ事業トシテ之カ研究ヲ重ネ、明治四十四年度ヨリ其ノ製造ニ著手シ、大正二年度ヨリ其ノ販賣ヲ開始シタリ。

其二　樟樹造林

樟樹造林ハ製腦原料漸次減少ヲ來スノミナルヲ以テ、天然樟樹ノ後繼ヲ造ルノ必要上、夙ニ計畫セラレ、大正十三年度末ニ至リ二萬町歩ノ官行樟造林地ヲ得ル豫定ヲ以テ、明治三十三年度以降實行セラレ、既ニ大正六年度迄ニ三萬二千二十町歩ノ造林ヲ遂行シタリ。然ルニ此ノ造林タルヤ樟樹ヲ以テ製腦原料ト爲シ、世界ノ需要ニ應スルニハ、植栽後四五十年ヲ要シ、之カ最小年限ヲ以テスルモ尙二十五年ヲ待タサルヘカラサルナリ。然ルニ一方世界ニ於ケル樟腦ノ需要ハ上述ノ如ク年々增加シ、殆ト底止スル處ヲ知ラサルカ如キ狀態ナルヨリ、到底既定計畫ヲ以テシテハ滿足スルノ域ニ達スルコト能ハサルヲ認メ、更ニ造林地積擴張ノ計畫ヲ立テ、大正七年度ヨリ同十八年度ニ至ル迄ニ、年々五十町歩乃至千五百町歩ノ造林ヲ實行シ、同六年度以前ノ造林地ヲ併セ、合計五萬五千餘町歩ノ造林ヲ得、別ニ恒春半島及東海岸地方ニ矮生スル一種ノ樟樹カ、其ノ葉ニ含腦量多クシテ普通ノ樟腦ニ比シテ萠芽力頗ル旺盛ナルヨリ、之ヲ葉製樟腦生產ノ目的ヲ以テ差當リ五千町歩ノ造林ヲ爲シ、更ニ之ヲ擴張スルノ計畫ヲ立テ居レリ。尙花蓮港府管內ニ、天然樟樹ノ純林狀ヲ爲セル壯齡林アルヲ以テ之ヲ保護林トシ植樹造林地ト同樣ノ取扱ヲ爲シ、植付樟樹ト共ニ製腦原料ニ供セントス。而シテ以上ノ天然樟樹及植付樟樹ノ原料ヲ以テ、將來年々粗製樟腦八百萬斤內外(樟腦油中ニ包含セル樟腦ヲ計算シ)ヲ生產セシムル見込ナルカ、尙造林木ヲ原料トシテ製腦シタル後ノ伐採跡地ハ伐採ノ翌年之ヲ造林シテ、以後年々伐植ヲ併行シ、輪伐作業ニ依リ、永遠ニ原料ノ保續ヲ爲ス方針ナリト云フ。

第四章　朝鮮

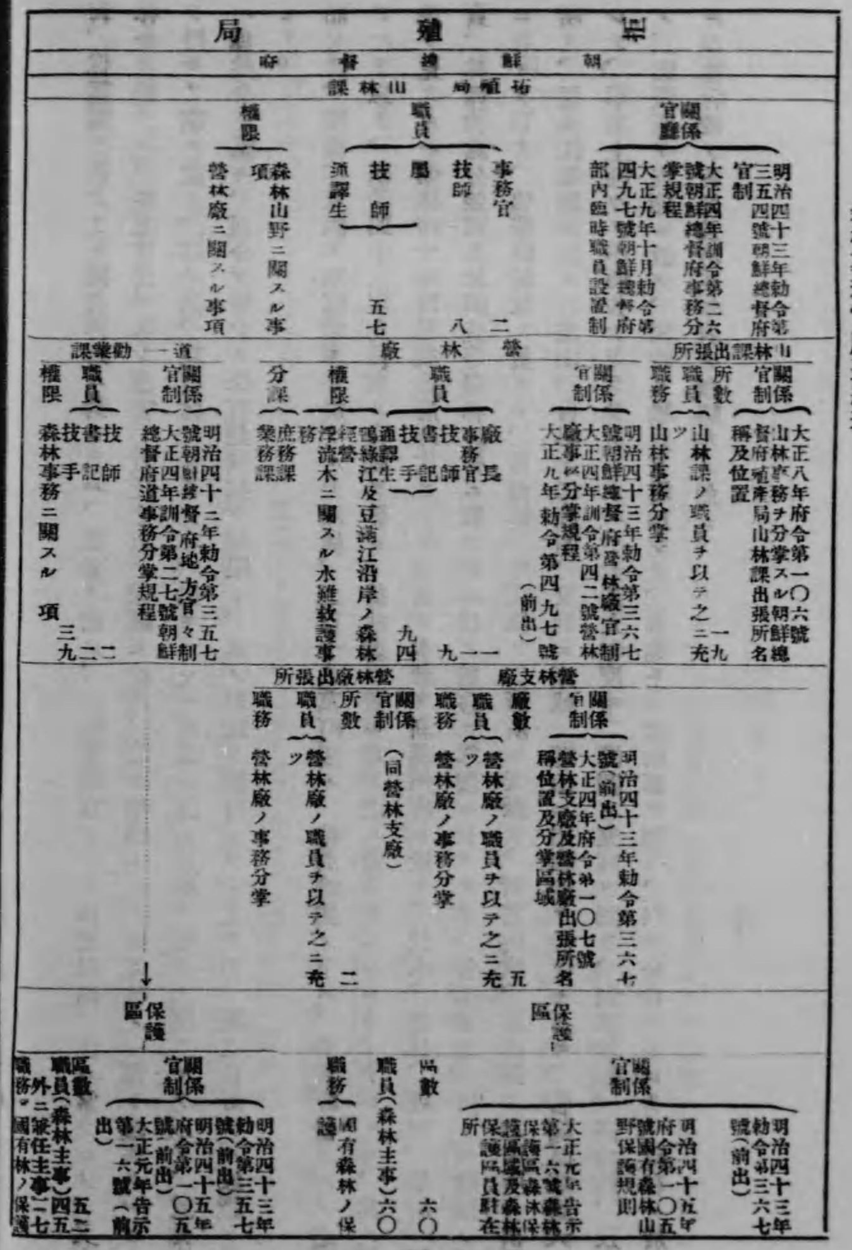
第一節　日韓併合後ノ林政沿革

李朝ノ末葉、政治ノ權威全ク地ニ墜チテ、上下疲弊シ、苛歛誅求ノ極、庶民ヲシテ山間ニ遁レ、私カニ火田ヲ拓カシムルノ弊害ヲ馴致シ、其ノ結果遂ニ、冒耕ヲ公認スルノ端ヲ啓ケリ。從テ、森林ノ如キハ保續ノ途ヲ講セラルルコトナク、益〻荒廢シテ、山岳遂ニ赭禿シ、滿目荒涼トシテ、國土ノ保安亦維持セラレス、產業ノ發達全ク阻止セラレ、其ノ災害舉テ算フヘカラサルニ至レリ。茲ニ於テ、舊韓國政府ハ隆熙二年（明治四十一年）一月森林法ヲ發布シ、一般山野ノ保護、整理、增殖ヲ圖リ、盛ニ殖林ヲ奬勵シタルモ其ノ効果ヲ見ス。其ノ後、日韓併合ニ及ヒ、明治四十四年七月朝鮮總督府ニ於テ、新ニ森林令ヲ布キ、保安林ノ制度ト共ニ、永年禁養シタル森林ノ讓與ヲ認メ、或ハ造林貸付ノ特典ヲ設ケ、以テ愛林思想ヲ助長スルニ努メ、一般ニ森林事業促進ノ策ヲ講セリ。次テ、大正元年五月府令ヲ以テ、國有森林山野保護規則ヲ制定シ、地方長官ヲシテ之カ保護ノ責任者タラシムルト共ニ、特ニ保護ノ急要ナル京畿外八道ノ重要林野十六箇所ニ保護區ヲ設置シ、大正二年九月十二箇ノ森林監視所ヲ新設シ、專ラ國有林野ノ保護取締ニ當ラシメ、同六年度ニ於テ、尙四箇所、七年度ニ於テ一箇所、八年度ニ於テ二十七箇所ヲ增設シ、都合五十二箇所ノ森林保護區ヲ見ルニ至レリ。又同八年度中、保護制度ニ改正ヲ加ヘ、從來ノ山林監守、山林監守補ヲ道森林主事及森林監守トナシ、森林主事ニ對シテハ、刑事令ニ依リ司法警察權ヲ付與シ、同十年ニハ森林監守ヲ廢シ、舉テ之ヲ森林主事ニ改メ、保護ノ周到ヲ期セリ。

尙、保護區ヲ置カサル國有林野ニ對シテハ、從來ノ如ク、一般警察官ヲシテ保護取締ノ任ニ當ラシメ、又森林令ニ於テハ、地元住民ニ對シ連帶ノ責任ヲ以テ保護セシメ、之カ報酬トシテ林產物ノ一部ヲ讓與スルコトヲ得ルノ制ヲ設ク、其ノ他、私有林ニ在リテハ、動モスレハ濫伐ニ流レ荒廢ヲ招クノ虞アルヲ以テ、道知事ハ森林令ニ基キ、道令ヲ發シテ保育並伐採ヲ制限シ、其ノ取締ヲ勵行シツヽアリテ、漸次良好ナル成績ヲ示セリ。

而シテ、鴨綠、豆滿ノ兩江沿岸ニ於ケル大深林、二百十八萬町歩ハ、特別機關ノ下ニ、管理經營スルノ必要アルヲ以テ、明治四十三年九月新ニ官制ヲ發シ、營林廠ヲ置キ專ラ之ニ當ラシムルコトヽナレルモ、其ノ創設ヲ見タルハ明治四十年四月統監府時代ニシテ、其ノ本廠ヲ新義州府ニ置キ、伐木、造林、運材、製材、販賣、林產物處分並國有林調査等森林經營ニ關スル一切ノ業務ヲ掌理セシメタリ。各事業地ハ何レモ遠隔ノ地ニ在ルヲ以テ、鴨綠江流域ニ於テハ、惠山鎭、中江鎭ノ二箇所ニ支廠ヲ、新乭坡鎭、高山鎭ノ二箇所ニ出張所ヲ、豆滿江流域ニ於テハ茂山、會寧ノ二箇所、又別ニ京城、龍山ニ出張所ヲ設置セルモ、營轄區域廣大ニシテ、事業上種々ノ不便少ナカラサリシカハ、大正九年度中、機關ノ充實ヲ圖リ、新嘉坡鎭、高山鎭、茂山ノ三出張所ヲ支廠ニ改メ、同時ニ職員ヲ增加シテ、事業上一大刷新ヲ加ヘ、以テ今日ニ至レリ。現在ニ於ケル森林行政ノ系統及沿革年表ノ概略左ノ如シ。

森林事務官廳系統表



沿革年表

年次　沿革

明治四十三年　八月、日韓併合條約成ル

九月、朝鮮總督府官制、營林廠官制、朝鮮地方官官制發布（勅令）

林籍調査ニ着手ス

同　四十四年　一月、殖林思想振興ノ爲メ農商工部長官ヨリ神武天皇ノ祭日ヲ期シテ記念植樹ヲ擧行シ毎年ノ恒例トナスヘキ旨各道長官ニ對シ通牒ヲ發ス

六月、森林令發布（制令）

八月、森林令施行手續ヲ定ム（訓令）

十月、公私立各學校ニ於テハ可成學校林ヲ經營セシムヘキ旨各道長官ヘ通牒ヲ發ス

十一月、要存置豫定林野選定標準ニ關シ各道長官ヘ通牒ヲ發ス

十二月、地方費ヲ以テ造林事業ヲ經營セシメ地方財源ノ基礎ヲ確立セシムヘキ旨各長官ヘ通牒ヲ發ス

明治四十五年（大正元年）二月、森林山野及未墾地ノ國有私有區分標準ヲ定ム（訓令）

三月、極印使用規程ヲ定ム（訓令）

五月、國有森林山野保護規則ヲ定ム（府令）

八月、森林保護區設置（告示）

同　國有森林未墾地及森林產物特別處分令發布（勅令）

九月、國有森林未墾地及森林產物特別處分令ニ依ル重要物產製造業者、緣故者及木材業者ノ資格ヲ定ム（府令）

十一月、森林山野ノ保護ニ付キ警察官吏ヲシテ地方長官ヲ補助セシムルノ訓令ヲ發ス

十二月、地方費經營ノ模範林ニ關スル取扱ノ方針ニ關シ各道長官ヘ通牒ヲ發ス

大正　二年　二月、國有林野區分調査內規ヲ定ム（訓令）

同　四年　九月、樹苗圃事業經營方針ニ關スル件ニ付各道長官ヘ通牒ヲ發ス

同　五年　四月、火田整理ニ關スル件ニ付キ內訓ヲ發ス

第三編　北海道及新領土ニ於ケル森林經營

同　六年　十月、國有森林山野ハ殖林保護ヲ主眼トシ、伐採ハ力メテ之ヲ制限スヘキ旨各道長官ニ通牒ヲ發ス
同　七年　四月、林野調査委員會官制發布（勅令）
　　五月、朝鮮林野調査令（制令）ヲ發シ續テ附屬法令ヲ定ム
　　六月、不要存置林野ノ賣拂處分ヲ要スルモノニ付テハ公賣ヲ原則トスル旨各道長官ヘ通牒ヲ發ス
同　八年　六月、農商工部山林巡廳所設置（府令）
　　同　森林主事特別任用規程ヲ定ム（府令）
　　十二月、林野調査委員會事務章程ヲ定ム（訓令）
同　九年　十月、總督府部内ニ臨時職員ヲ設置シ林業ニ於テハ水源涵養造林、國有林調査及林業試驗ニ關スル人員ヲ定ム（勅令）

第二節　一般森林

朝鮮全道ノ總地籍ハ一四、三一二方里、卽チ二千二百二十五萬八千町歩ニシテ、林野ノ見込面積千五百八十八萬三千町歩ナルカ故、全地籍ニ對シ七割一分强ヲ占ムル割合トナリ、我本州ノ森林面積ト相伯仲セリ。

明治四十三年中、施行セル林籍調査ノ結果ハ

林野總面積一五、八八三、〇〇〇町	成林地	五、四八二、〇〇〇町	三四%
	稚樹發成地	七、二八五、〇〇〇	四六
	無立木地	三、一一六、〇〇〇	二〇

ニシテ、其ノ林相分布ノ狀ヲ大觀スルニ、樹林地ハ主トシテ北部ノ交通尙不便ナル部分ニ存シ、彼ノ鴨綠、豆滿ノ兩江ニ生茂スル大深林ノ如キハ、蓋シ東洋ニ於テモ屈指ノモノニ屬ス。之ニ反シ、比較的交通便ナル方面ニ在リテハ、未立木地及稚樹發生地多ク、京城大邱ノ間ニ在ル、所謂錦江流域ニ屬スルモノノ如キハ、荒廢ノ最强度ナルモノトス。

明治四十三年中、林籍調査ノ結果、國有林野ニ對シ、要存置不要存置區分ヲ調査スルノ必要ヲ認メ、營林廠所屬要存置豫定林野約二百二十萬町ハ、大正二年度ヨリ十一年度ニ至ル十箇年間ニ、同廠ノ事業トシテ之ヲ調査シ、其ノ他ノ要存置豫定林野三百五十萬町歩ト、不要存置林野約二百萬町歩計五百五十萬町歩ハ、總督府ノ直接事業トシテ明治四十四年度ヨリ開始シ、主トシテ權利關係ノ複雜ナル地域、荒廢甚シクシテ造林ノ急施ヲ要スル地域及河川水源地ニシテ保護上重要ナル地域ヨリ著手シ、大正十一年度ヲ以テ完了セシムル見込ナリトノコトナルモ、多少ノ延期ヲ免レサルヘシ。尙右ノ存置不要存置區別ハ、一定標準ニ依ル豫定的調査ニ係リ決定的ノモノニアラサルヲ以テ、不日、精査ヲ告クルニ及ハハ、現在ノ要存置豫定林野中ニ於テモ、國ノ經營上必要ナキモノハ、更ニ不要存置ニ編入シテ、一般ニ開放セラルヘキカ故、其ノ面積ハ意外ノ增減ヲ見ルナルヘキカ。又朝鮮ニ於ケル林野ノ所有權若ハ占有ニ基ク權利關係ハ古來曖昧混沌トシテ今卒カニ判明シ難ク、若シ現在ノ儘ニ推移センカ、如何ニ造林ヲ奬勵スルモ、其ノ目的ヲ達スルコト容易ナラサルヲ以テ、此等ノ權利關係ヲ確定シ、前記林野ノ區分調査ト相俟テ、國有林管理上ノ基礎ヲ確立シ、一般林業ノ發展ヲ期スルコトトナレリ。

國有林野中、國土保安又ハ經營ノ爲、國ニ於テ保存ノ要アルモノト否ラサルモノトノ區分ハ、所謂林野調査區分ニヨリ決定セラルヘキモノニシテ、其ノ要存置ニ係ルモノハ、保存程度ノ高下ニ依リ、更ニ之ヲ甲乙二種ニ分チ、公用又ハ公益事業ノ爲、必要ナル場合若ハ一時限貸付ノ外、之カ處分ヲ爲ササルモノヲ甲種トシ存置ノ必要ナキニ至リ、又ハ特ニ解除ノ要アリト認ムル場合ニ於テ處分シ得ルノ餘地ヲ存スルモノヲ乙種トシタルモノニシテ、普通一般ノ出願ニ對シテハ、主トシテ不要存置林野ニ付テ處分ヲ行フコトトセリ。不要

存置林野モ、亦之ヲ第一種、第二種ニ區分シ、特定ノ緣故關係アルモノ、及部落林豫定地ヲ第二種トシ、其ノ以外ニ特殊ノ關係ヲ有セス一般的賣拂、貸付處分ニ付スヘキモノヲ第一種トセルモノニシテ、大正九年度迄ニ施行セル國有林野處分ノ件數、面積左ノ如シ、

種類	件數	面積	備考
貸付	三九、一二三	五七一、〇三一町	大學及農林學校ノ演習林トシタル七件、面積一三〇、八一八町歩ヲ含マス
賣拂	六一五	一四、四三八	
譲與	三六、一三五	一〇一、二七二	
交換	三	三、四七八	
部分林	五	一、四一〇	
計	七ヵ、八八一	六九一、六二九	

要存置林野ニ付テモ、亦明治四十四年度以降、施業案編成ノ調査ヲ開始シ、已ニ編成ヲ了シタルモノ尠ナカラス。區分調査完了ノ曉ハ、專ラ力ヲ此ノ方面ニ盡クスニ至ルヘシ。

殖林事業ニ付テハ、明治四十年度以降國費ヲ以テ、京城附近其ノ他ニ造林ヲ行フト同時ニ一般當業者ニ國費養成ニ係ル種苗ノ無償下付ヲ爲シ、又地方費及恩賜金經營ニ屬スル苗圃ニ於テ養成シタル苗木ノ下付ヲ爲シ、更ニ明治四十四年度ヨリ、各道ニ地方費模範造林ヲ實行セシメラレタルト其ニ、民間ニ圖有林野中不要存置ノ部分ヲ貸付シ、造林成功ノ後、之ヲ無償ニテ付與スルノ途ヲ開キ、且日韓併合ヲ記念スルカ爲、每年神武天皇祭ノ當日ヲ期シテ記念植樹ヲ爲サシメ、又御大典ニ際シテ同樣記念植樹ヲ爲サシメタル等、銳意造林ヲ奬勵セル結果、朝鮮ニ於ケル殖林事業ハ、異數ノ發達ヲ遂ケ、大正九年度末ノ官民植栽面積數萬町歩ニ達シ之ヲ日韓併合當年(明治四十三年)ノ四千餘町歩ニ比スレハ、約十五倍ノ激增ヲ示セリ。

官公營ノ苗圃ハ明治四十三年度ニ於テハ十一箇所、面積六十二町歩ノ設置ニ過キサリシモ、歲月ト共ニ增設セラレ、大正九年度末ニハ、其ノ數七十八箇所、此ノ面積二百三十九町歩ヲ算スルノ盛況ニ達セリ。然レトモ、植林事業ハ、尙一層ノ發展ヲ來タセルカ爲、該苗圃ノ生產苗木ノミニテハ、到底供給ニ應スルニ足ラス自然各處ニ私營苗圃ノ開設ヲ見ルニ至リ、當時、私營苗圃ノ多クハ規模ノ狹小ヲ免レサリシカ、輓近殖林組合、林業契等ノ組合苗圃、殖林企業者、造林用ノ大苗圃又ハ販賣ヲ目的トスル苗木商ノ大苗圃等、續々增設ノ機運ニ向ヒタリ。

森林組合其ノ他松契、殖林契等ノ名稱ヲ有スル森林關係ノ團體ヲ合スレハ、全數一千三百五十四(大正十年六月調査)ニ上リ、其ノ組合總人員四四九、五六〇人、事業目的地ノ面積一、八一三、七九九町歩ニシテ、各、相當ノ事業ヲ經營セリ。又民間企業者トシテ指ヲ屈スヘキハ、東洋拓殖株式會社、釜山並釜山學校組合、三井合名會社、株式會社中村組、朝鮮貴族林業組合普植園、川崎農場、住友吉左衞門、半田善四郎、多木粲次郎、西鮮造林合資會社、片倉組、大寶農林部、田中友吉等ニシテ、大規模ノ林業經營少ナカラス。此等ハ、總テ總督府ノ施設ト相俟テ、他日朝鮮ノ林野ヲシテ、全ク舊來ノ面目ヲ一新スルニ至ラシムヘキモノタルヲ疑ハス。

跋

林學博士松波秀實君ハ明治二十二年始メテ職ヲ農商務省山林局ニ奉シ大正十一年ニ冠セラルルニ至ル迄實ニ三十有四年憶フニ本邦ノ林政ハ此ノ期間ニ於テ漸ク基礎ヲ確立シ進ムテ諸般ノ法規ヲ完備シ遂ニ積極的經營ノ實行ニ移リタルモノニシテ其ノ進歩ノ速カナル洵ニ驚ク可シ博士ハ此ノ間一貫シテ大小ノ事務ニ接觸シ常ニ渾身ノ精力ヲ傾倒セラルル本邦林業ノ今日アルハ時勢ノ然カラシメタルモノアリト雖抑、博士カ其ノ促進ニ努力セラレタルノ功亦多キニ因ラスムハアラス

往年博士劇務ノ餘暇ヲ以テ明治林業史要ヲ著シ其ノ後ノ變遷ニ對シテハ更ニ續輯ヲ刊行スルノ意アリテ原稿殆ト成リ挂冠後之ヲ點檢セラレタルモノノ如キモ業未タ終了ニ及ハスシテ溘焉不歸ノ客トナレリ今未

完ノ稿本ヲ擧ケテ排印ニ附スルハ恐ラク博士ノ意ニ非サルヘシト雖徒ニ筐底ニ藏シテ蠹魚ニ委セムヨリ寧ロ之ヲ公ニシテ斯界ヲ裨益スルニ如カスト信スルニ由ル

博士ノ明治林業史要ニ於ケルヤ名流ノ題字ヲ煩ハシ耆宿ノ序跋ヲ需メス之猶錦衣繡裳ヲ纏ハスシテ威儀自然ニ具ハルノ類ナラム乎然ルニ本輯ニ予ノ跋文ヲ附スル或ハ博士ノ意ニ背クノミナラス却テ敝褐ヲ以テ其ノ面目ヲ瀆スニ等シキヲ惧ルト雖敢テ一言ヲ費ス所以ノモノハ此ノ書カ博士ノ遺稿ニ出テ未タ刪定ヲ經タルモノニ非サルコトヲ明カニセムト欲スル耳

大正十三年一月　　辱知　林學博士　佐藤鋹五郎誌

大正十三年三月二十五日印刷
大正十三年三月三十日發行

定價四圓五拾錢

發行者　東京市赤坂區溜池町一番地　大日本山林會

代表者　東京市麻布區宮村町一番地　福井正吉

印刷者　東京市麹町區紀尾井町三番地　福王俊禎

印刷所　東京印刷株式會社　東京市麹町區紀尾井町三番地　麹町出張所

ナ4M53

印刷所　株式會社　秋山印刷所　東京市麻布區霞町三番地

印刷者　王　發　謙　東京市麻布區霞町三番地

發行者　鶴　井　五　吉　東京市麻布區霞町一番地

發行所　大　日　本　山　林　會　東京市赤坂區溜池一番地

大正十三年三月三十日發行

大正十三年三月二十五日印刷

定價四圓五錢

終